

博士論文

中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究

—中国語で可能標識が使われる表現を中心に—

関 承

広島大学大学院国際協力研究科

2014年9月

中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究

—中国語で可能標識が使われる表現を中心に—

D113651

関 承

広島大学大学院国際協力研究科博士論文

2014年9月

広島大学大学院国際協力研究科

論文名： 中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究
—中国語で可能標識が使われる表現を中心に—
学位の名称： 博士(教育学)
学生番号： D113651
氏名： 関 承

2014年 7月 15日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治



教授

黒田 則博



准教授

深見 兼孝



広島大学大学院文学研究科 教授

高永 茂



関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科 教授

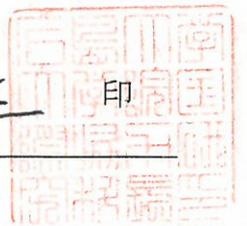
于 康



平成26年 9月 5日

研究科長

藤原 章正



目次

第一章. 序論	1
1.1 研究の背景、目的、意義、方法及び構成	2
1.1.1 本研究の背景	2
1.1.2 本研究の目的	3
1.1.3 本研究の意義	4
1.1.4 本研究の方法	4
1.1.5 本研究の構成	5
1.2 本研究の立場	5
1.2.1 自・他動詞	5
1.2.1.1 自・他動詞の認定	5
1.2.1.2 自・他動詞の対応	7
1.2.2 可能の表現形式	7
1.2.2.1 形態によって表される有標識可能	7
1.2.2.2 語彙と構文によって表される無標識可能	8
1.2.3 無標識可能自動詞と無標識可能形式に関わる先行研究	9
1.2.3.1 張 (1998、2012)	10
1.2.3.2 姚 (2006、2008)	11
1.2.3.3 呂 (2007、2010)	12
第二章. 自・他動詞の新たな分類	15
2.1 はじめに	16
2.2 先行研究とその問題点	16
2.2.1 青木 (1997)	16
2.2.2 長友 (1997a、1997b)	19
2.2.3 都築 (2001)	21

2.3 自・他動詞の新たな分類	24
2.3.1 新たな分類表とその基準	24
2.3.2 新たな分類表における先行研究との違い	25
2.3.2.1 青木（1997）との違い	25
2.3.2.2 長友（1997a、b）との違い	25
2.3.2.3 都築（2001）との違い	25
2.4 分類方法	26
2.4.1 意志動詞のグループ	26
2.4.2 無意志動詞のグループ	27
2.5 本章のまとめ	29
第三章．アンケート調査の方法	30
3.1 調査対象及び期間	31
3.2 調査項目と手順	31
3.3 調査対象者の属性	35
3.4 分析方法	38
第四章．有・無標識可能表現における有対自・他動詞の習得	40
4.1 はじめに	41
4.2 先行研究とその問題点	42
4.2.1 小林（1996）	43
4.2.2 封（2007）	43
4.3 調査結果と考察	46
4.3.1 有対自動詞のみが成り立つ表現の場合	46
4.3.2 有対他動詞のみが成り立つ表現の場合	47
4.3.3 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現の場合	48
4.3.3.1 有対動詞の種類の主効果	50
4.3.3.2 調査参加者の学年×有対動詞の種類の変数間の相互作用	51
4.3.3.2.1 単純主効果の A (b1) と A (b2)	51
4.3.3.2.2 単純主効果の B (a1) と B (a2) と B (a3)	52

4.3.4 調査結果と考察のまとめ	53
4.4 本章のまとめ	55
第五章. 形態上の対応は有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の習得に影響をもたらすか—異なる対応型の使用状況を比較して—	57
5.1 はじめに	58
5.2 調査計画	58
5.3 調査結果	58
5.4 分析	60
5.5 本章のまとめ	61
第六章. 有・無標識可能形式が作れる無対動詞の習得	63
6.1 はじめに	64
6.2 無対動詞に着目した習得研究の必要性	64
6.3 調査計画	66
6.4 結果と分析	66
6.5 考察	69
6.5.1 言語転移	69
6.5.2 教科書の影響	71
6.5.3 過剰般化	75
6.6 本章のまとめ	78
第七章. 無標識可能自動詞と無標識可能形式の指導法	80
7.1 はじめに	81
7.2 教科書での取り扱い方	81
7.3 教科書の問題点	90
7.4 指導法の提案	92

第八章. 結論と今後の課題	95
8.1 結論	96
8.1.1 本研究の研究史における意義	96
8.1.2 本研究の日本語教育における意義	97
8.2 今後の課題	98
参考文献	99
資料	104
資料 1	105
資料 2	106
資料 3	107
調査データ	108
謝辞	134

第一章

序論

1.1 研究の背景、目的、意義、方法及び構成

1.1.1 本研究の背景

『日本語学習者作文コーパス』¹を調べると、中国語母語話者には次のような誤用²が見られる（(→)は正用、〈 〉は学習者のレベル+CG（中国での学習者）+個人番号）。

- (1) たくさんの漢字の発音をおぼえられるし、一日日本語を聞く時間も**増えられる**（→**増える／増やせる**）。〈中級 CG053〉
- (2) 練習をするだけでなく、日本のアニメとテレビドラマを常に見るなら、たくさん新しい単語を知られるだけでなく、固定の日本語使い方も**分かれる**（→**分かる**）。〈中級 CG018〉

学習者による母語訳：

- (1') 一是可以记住许多汉字的读音，二是二十四小时里至少可以保证八小时左右自己在听日语。
- (2') 不仅仅是做练习，如果经常看日本的动画和电视剧的话，不光能知道很多心单词，固定的日语用法也能明白。

(1) は自動詞かそれに対応する他動詞の可能形で表すべきところを自動詞の可能形にしてしまった誤用であり、(2) は自動詞だけで表すべきところを「られる」の形にしてしまった誤用である。(1) では、有対自動詞³に対応する他動詞の可能形「増やせる」に置き換えても意味的には変わらないので、自動詞を使うだけで可能の意味が出てくると考えられている（青木 1997、張 1998 など）。一方、(2) の「日本語使い方も分かる」は「日本語の使い方も理解できる」ということを意味している。

¹ 『日本語学習者作文コーパス』は、日本語学習者の作文データをコーパス化したものである。初級から上級の日本語学習者 304 名の作文データが収録されている（語数の合計は 113,554 語）。作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」（192 名分）と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112 名分）である。詳細はホームページ（<http://sakubun.jpn.org>）を参照されたい。

² 誤用例 (1) と (2) の「増えられる→増やせる」と「分かれる→分かる」といった添削情報はコーパスが提供したものである。ただし、(1) の「増えられる→増える」も成り立つので、この添削は筆者によるものである。

³ 日本語の動詞には自動詞と他動詞が形態的・意義的・統語的に対応するものもあれば、対応しないものもある。その対応し合う動詞は「相対自動詞、相対他動詞」（寺村 1982）、「有対自動詞、有対他動詞」（早津 1987b）と呼ばれ、その対応し合わない動詞または対応する動詞を持たない場合は「絶対自動詞、絶対他動詞」（寺村 1982）、「無対自動詞、無対他動詞」（早津 1987b）と呼ばれている。本研究では、早津（1987b）の呼称にしたがう。

誤用のところに対応する学習者による母語訳を見ると、(1') と (2') に可能助動詞の「可以、能」という中国語の可能標識⁴が使われている。それらに対応する日本語の正用文における可能の意味は、可能標識（可能形）を使わずに「シタクスの可能」と「語彙的可能」⁵で表される。このような両言語における構造的な差によって、母語からの負の転移が起り、誤用が生じてくる。そのため、学習者は日本語の自・他動詞を習得⁶するときに、負の転移で習得が困難になると考えられる。

このように日中両言語は標識上の構造的な差がある。可能の意味は中国語では有標識で表されるが、日本語では無標識でそれを表す自動詞と表現形式がある。これを「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」と呼ぶことにする。一方、日本語では、中国語と同じく有標識で可能の意味を表す自・他動詞と表現形式もある。これを「有標識可能自・他動詞」と「有標識可能形式」と呼ぶことにする。

1.1.2 本研究の目的

本研究は中国語母語話者が、母語における可能標識が使われる表現に対応する日本語の自・他動詞、すなわち「有標識可能自・他動詞」と「無標識可能自動詞」をどのように習得していくのか、そして日本語教師がそれをどのように指導すればよいのかといったことについて研究するものである。目的は、中国語母語話者における日本語の自・他動詞（「有標識可能自・他動詞」と「無標識可能自動詞」）の習得過程などを解明し、適切な指導法を提案することにある。その詳細は以下の5点である。

1. 可能という観点から、自・他動詞の新たな分類を行う。この新たな分類は従来の自・他動詞に関する分類とは異なるものである。そして、この分類によるアンケート調査に基づいて、中国語母語話者の習得過程などを明らかにする。
2. 新たな分類によるアンケート調査をもとに、文法的な側面から有・無標識可能表現における有対自・他動詞の習得過程などを考察する。

⁴ 中国語では、可能を表す標識として可能助動詞「能、会、可以」などと、可能補語「動詞+得/不+結果補語・方向補語」「動詞+得/不+了」などが用いられる。詳しくは趙（1979）を参照されたい。本研究では、これらの標識を使って可能（性）を表す表現を可能表現と見なす。

⁵ 張（2012）では、特定の条件下で有対自動詞構文によって指し示される可能を「シタクスの可能」と呼び、有対自動詞のもつ語彙的なレベルでの可能を「語彙的可能」と呼んである。この「語彙的可能」を特定の構文要素の共起や文脈支持などがなくても可能の意味が成立するものと定義している。本研究はこの定義にしたがい、無対自動詞が無標識で表す可能にも「語彙的可能」がある。

⁶ 本研究では、「習得」という用語は特別に比較する場合を除いては、「学習」と区別しない。

3. 目的 2 の不備な点を補充するために、新たな分類によるアンケート調査を通じて、形態上の対応が、有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の習得に影響するかどうか、影響すればその使用状況はどのようになるかといった点を検討する。
4. 新たな分類によるアンケート調査に基づいて、有・無標識可能形式が作れる無対動詞の習得過程を考察するとともに、習得を容易・困難にさせている要因を探る。
5. 新たな分類によって中国語版の日本語教科書を分析し、適切な自・他動詞の指導法を提案する。

1. 1. 3 本研究の意義

中国語には日本語の自動詞と他動詞のような区別はないので、中国語を母語とする日本語学習者のみならず、日本語の教師までもが母語の影響を受け、自動詞と他動詞の使い分けがうまく理解できず、不自然な文を作ってしまうことがよくある。また、自・他動詞に可能形を過剰に不適切に付加するといった誤用もよく見られる。そのため、自・他動詞とその可能形の使用は日本語を習得する際の難点の一つだと考えられる。さらに、可能形の作り方は、初級教科書に導入されている文法項目であるとはいえ、その習得と使用が上級日本語学習者にとっても困難なようである。本研究はこれらの難点を突破する一つとなり、日本語教育の方法や教材の改善などに役立つと思われる。

1. 1. 4 本研究の方法

1. 1. 1 で述べた本研究の目的を遂行するために、次を留意点として研究を進めていく。それは動詞分類、アンケート調査及び教科書の考察といったような複数の研究方法を取り入れて、多視点からのアプローチを行うといった点である。動詞分類とは、中国語母語話者に対する日本語教育の視点からみたものである。アンケート調査とは、主に横断的研究 (cross-sectional study) の方法を用いるものである。そして、教科書の考察とは、動詞分類によって、三種類の中国語版日本語教科書における問題点を明らかにするものである。このように、本研究は自・他動詞の習得を研究するにあたって、単一の研究方法で行うのではなく、多方面からの考察を行うものである。さらに、それぞれの調査データに対しては、その目的やデータの特性などに応じて、統計手法などを行って検討する。

1.1.5 本研究の構成

論文の構成は以下のとおりである。

第一章では、本研究の背景、目的、意義、方法および構成を述べ、本研究の立場を提示する。そして、先行研究をまとめて紹介する。

第二章では、自・他動詞の分類に関する先行研究の問題点を明らかにし、それらとの異同を論じながら、可能という観点から自・他動詞の新たな分類を行う。

第三章では、自・他動詞の新たな分類によるアンケート調査の調査方法について紹介し、調査対象者の属性などをまとめる。

第四章では、中国語を母語とする一年生から三年生までの学習者を対象に実施したアンケート調査をもとに、有・無標識可能表現における有対自・他動詞の習得過程と使用傾向などを明らかにする。

第五章では、第四章の不備な点を補充するために、三年生だけを対象としたアンケート調査をもとに、形態上の対応は有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の習得に影響するかどうか、影響すればその使用状況がどのようになるかといった点を明らかにする。

第六章では、中国語を母語とする一年生から三年生までの学習者を対象に実施したアンケート調査をもとに、有・無標識可能形式が作れる無対動詞に焦点をあて、その習得の状況と過程を解明し、習得を容易・困難にしている要因を明らかにする。

第七章では、中国語版の日本語教科書による分析を通じて、中国語母語話者に役立つ指導法を提案する。

第八章では、本研究の研究史と日本語教育という視点から意義を述べ、今後の課題を提示する。

1.2 本研究の立場

1.2.1 自・他動詞

1.2.1.1 自・他動詞の認定

これまで自・他動詞の認定に関する研究は多数なされている。代表的なものとしては、松下（1923、1924a、1924b）、佐久間（1936）、三上（1953）、奥津（1967）、寺村（1982）などがある。ここでは、日本語の文法界で評価されている三上（1953）の認定基準を取り

上げ、本研究の立場を定める。

三上（1953）では、受身を作れるかどうかによって日本語の動詞を分類した結果、受け身になるものを「能動詞」、ならないものを「所動詞」と名づけている。能動詞のうち、直接受身と間接受身になるものを他動詞、間接受身にはなるが、直接受身にはならないものを自動詞としている。

三上（1953）の分類を踏まえた松岡（2000：96）では、次のような説明がなされている。

動詞はそれが取る補語の種類によって、自動詞と他動詞に大別されます。

自動詞は、「泣く、生まれる」のように、ヲ格の目的語を取らず、直接受身にならないものです。一方、他動詞は、「食べる、聞く」のように、ヲ格の目的語を取り、直接受身にもなります。

自動詞は、「走る、泳ぐ」のような意志的自動詞と「割れる、落ちる」のような非意志的自動詞に分かれますが、後者には形態的・意味的に類似した他動詞を持つものがあります。これを「自他の対応がある」と言います。この場合、自動詞はある出来事が自然に起こったように表す一方、他動詞はそれが人間などの意志的な動作によって引き起こされたように表現します。

そして、三上（1953）の分類と松岡（2000）の分類がそれぞれ図 1-1 と図 1-2 に図示され、そこで「三上の言う自動詞は「意志的自動詞」に、「所動詞」は「非意志的自動詞」に対応することになります。この三上の主張は長い間あまり重要視されていませんでしたが、最近生成文法で盛んに議論されている「非対格性の仮説」という考え方を先取りしたものとして近年再評価されています」という記述がある（松岡 2000：104）。本研究は図 1-2 である松岡（2000）の分類を自・他動詞の認定基準とする。

図 1-1 三上（1953）の分類

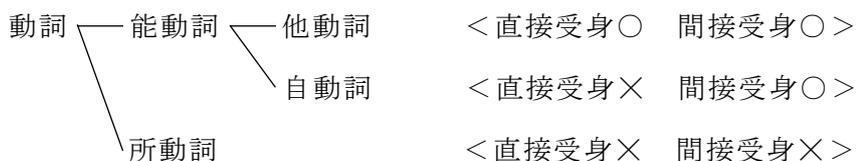
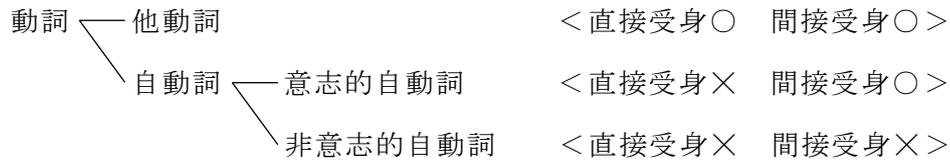


図 1-2 松岡（2000）の分類



1.2.1.2 自・他動詞の対応

1.2.1.1 で松岡が「自他の対応がある」ことについても言及している。松岡（2000:97-101）でそのペアに関する対応型が次の通りに示されている。本研究はこれらの対応型⁷の分類にしたがうことにする。

A1 : aru-eru 型	上がる-上げる	始まる-始める	見つかる-見つける	など
A2 : aru-u 型	刺さる-刺す	挟まる-挟む	塞がる-塞ぐ	など
B1 : reru-su 型	隠れる-隠す	崩れる-崩す	壊れる-壊す	など
B2 : reru-ru 型	売れる-売る	折れる-折る	切れる-切る	など
C1 : ru-su 型	写る-写す	治る-治す	返る-返す	など
C2 : eru-asu 型	遅れる-遅らす	逃げる-逃がす	増える-増やす	など
C3 : u(≠ru)-asu 型	動く-動かす	乾く-乾かす	飛ぶ-飛ばす	など
D1 : u(≠ru)-eru 型	開く-開ける	付く-付ける	届く-届ける	など
D2 : eru-u(≠ru)型	聞こえる-聞く	欠ける-欠く	砕ける-砕く	など
D3 : ieru-ru(≠u)型	見える-見る	煮える-煮る		など

1.2.2 可能の表現形式

1.2.2.1 形態によって表される有標識可能

現代日本語における可能の表現形式には、いくつかの形態があり、渋谷（1993：6）は次のように示している。

⁷ 自動詞と他動詞が同形であるサ変動詞は本研究の考察対象外である。

- (A) 可能動詞：書ケル・見レル
- (B) 動詞未然形＋助動詞「(ラ) レル」：(書カレル)・見ラレル
- (C) デキル・名詞＋デキル：勉強デキル
 - ・名詞＋ガ＋デキル：勉強ガデキル
 - ・動詞連体形＋コトガデキル：勉強スルコトガデキル
- (D) 動詞連用形＋ウル・エル：勉強シウル・勉強シエル

上のおり、現代日本語の可能は、主に (A) と (B) が「(ラ) レル」の形態、(C) が「デキル」の形態、(D) が「ウル・エル」の形態を取って表すものである。つまり、可能形態（可能標識）のあるものであると言える。

本研究では、上の (A) と (B) ⁸のような可能の意味を形態的に表す自・他動詞と表現形式をそれぞれ「有標識可能自・他動詞」と「有標識可能形式」と称することにする。

1.2.2.2 語彙と構文によって表される無標識可能

上述したことから分かるように、現代日本語では有標識可能形式は可能を表す表現形式として認められている。しかし、市川他（2010）などの教師用指導書には、無標識自動詞である「聞こえる、見える、分かるなど」も可能の意味を表すことがあると書かれている。可能の表現形式を使わず可能の意味を表せる自動詞と自動詞文、つまり可能の意味を表す標識のない自動詞とその表現が存在することになる。

まず、次の無対自動詞による例文 (1) と例文 (2) を見てみよう。

- (3) 辞書を引かないと、日本語の新聞はほとんど分からない。
- (4) 明日はいい天気なので、たぶん雨は降らない。
- (3') 如果不查字典的话、日语报纸几乎看不懂。
- (4') 明天是好天气、大概（不会下／下不了）雨。

(3) の「新聞は分からない」は「新聞の内容が読み取れない」、(4) の「雨は降らない」は「雨が降る見込み（可能性）がない」ということを意味している。(3) と (4) に

⁸ 本研究では、自・他動詞の使用と分類に関する分析対象は (A) と (B) の「(ラ) レル」すなわち可能形をめぐるものとする。

対応する中国語（3'）と（4'）を見ると、「分かる」は中国語の可能補語「看不懂」に、「降る」は中国語の可能助動詞「不会下」⁹と可能補語「下不了」に訳されていることがわかる。つまり、無標識で語彙的に表す日本語の無対自動詞可能は中国語の有標識の可能表現と対応関係を持つと言える。

一方、青木（1997：20）では次の有対自・他動詞による例文が挙げられている。

(5) なかなかシュートが決まらない／決められない

(6) 荷台が高すぎて荷物が載らない／載せられない

(5') 怎么都进不了球。

(6') 货架子太高，货物装不上。

(5) と (6) では、有対自動詞文を有対他動詞文の可能に置き換えても意味内容が変わらないと述べられている（青木 1997：20）。

(3) と (4) における有対自動詞文と有対他動詞可能文を中国語で表現すると、(3') と (4') になる。この2つの中国語訳からわかるように、有対他動詞可能文はもちろん、無標識で可能の意味を構文的に表す有対自動詞文も中国語の可能補語「进不了」「装不上」による可能表現と対応している。

本研究では、以上の観点から、標識のあるなしにより、より明確に表現できるように、前述の「有標識可能自・他動詞」、「有標識可能形式」に対応させ、無標識で可能の意味を語彙的・統語的に表す自動詞と表現形式をそれぞれ「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」と称することにする。1

1.2.3 無標識可能自動詞と無標識可能形式に関わる先行研究

無標識可能自動詞と無標識可能形式に関しては、ヤコブセン（1989）、乾（1991）、青木（1997、2008）、長友（1997a、1997b）、張（1998、2012）、龐（1999）、都築（2001）、張（2001）、王（2006）、大崎（2005）、呂（2007、2010）、姚（2006、2008）、楠本（2009）、大江（2010）などの先行研究がある。そして、その無標識可能自動詞と無標識可能形式を、乾（1991）は「無意志主体可能動詞」、張（1998、2012）は「結果可能表現」、龐（1999）は「可能動

⁹ 龐（1999：51）によれば、「会」の意味用法は、①学習や練習により、技術や能力を獲得したので、ある事柄をなすことができる、②行為の主体が本能的に備えている能力の有無を表す、③可能性の有る無しを表すなどある。ここの「会」は③の意味用法に該当する。

詞的ニュアンスを伴う自動詞」、都築（2001）は「可能の意味を含む自動詞」、大崎（2005）は「自動詞可能」、姚（2006、2008）は「無標（不）可能文」、呂（2007、2010）は「無意志自動詞表現」、楠本（2009）は「無標可能表現」、大江（2010）は「無標識可能」と呼んでいる。これらのうち、特に詳しいのは張（1998、2012）、姚（2006、2008）と呂（2007、2010）であるので、以下ではこの三人の研究を紹介したい。

1.2.3.1 張（1998、2012）

張（1998）は日本語に、「結果可能表現」という概念を導入している。結果可能表現は動作主の意図した「状態変化」が実現できるか否かを、動作が行われた結果という視点から捉えようとするものである。

例えば、「開ける」と「開く」はそれぞれ対応する他動詞と自動詞である。対応する他動詞を持つ自動詞を有対自動詞と呼ぶ。この有対自動詞は結果可能表現の主な表現形式であると張（1998）は指摘している。有対自動詞は意志的動作の働きかけにより動作主の意図した対象物の「状態変化」が引き起こされることを表す。これは結果可能表現の定義に当てはまる。張（1998）に以下の例文があげられている。

(7) 腕が痛くて手が上がらない

この(7)では、動作主が「手を上げようとする」意志的動作が文の背後にあると張（1998）は主張する。その動作の結果として動作主の意図した状態変化、つまり「手が上がる」ことが実現したり、しなかったりする。その意味で有対自動詞「上がる」は「状態変化」を含意する。そして、自動詞に対応する他動詞「上げる」は「動作主の意図」、「働きかけ」の役割を担っているとす。しかし、張（1998）は、有対自動詞表現であれば、必ずしも結果可能表現になるわけではないことも論じている。

(8) 時代が移るにつれて風俗が変わる。

張（1998）は、状態変化は動作主の意志的動作により引き起こされるとしており、(8)ではそれがないと指摘する。つまり「時代が移る」のは人間の意志とは無関係な現象であり、さらに、「風俗が変わる」のは「時代が移る」ことに伴う無意志的な現象であって、そ

の背後には動作主の働きかけはない。従って、(2) の文の主節も従属節も結果可能表現にはならない。以下の文も同様である。

(9) この間の大地震でたくさんの家が倒れた。

(8) と同じように (9) の「家が倒れた」という現象は、動作主の意志的動作により引き起こされた状態変化ではない。つまり「倒そうとする」意志を持つ動作主が (3) の文では考えられないのである。

(10) お爺さんはあの事故で目が見えなくなった。

(11) 耳が遠いので、小さい声は聞こえません。

(12) この役は男には勤まらない。

(13) その球場には客がどのくらい入りますか。

また張 (2012) では、(7) のような自動詞文の意味を語彙的なレベルで可能の意味を指し示す自動詞文 (10) ~ (13) と区別して、「シンタクスの可能」と見なす。結果可能表現の研究は、この「シンタクスの可能」を対象とするものであり、動作主の動作・行為がなされた後、主観的または客観的条件によって、動作主の意図した状態変化がその思い通りに実現することができるかできないかを指し示すものでもあると定義している。

1.2.3.2 姚 (2006、2008)

姚 (2006、2008) は可能の標識を用いずに、有対自動詞文に可能の意味解釈が成り立つ場合、「無標 (不) 可能文」と名づけている。

(14a) こうなれば隠れているやつを引きずり出して、謝らせてやるまではひかないぞと、心を極めて、寝室の一つを開けて中を検査しようと思ったが開かない。

(14b) 錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるのか、押しても、押しても決して開かない。

動作主の意志的動作による働きかけが想定される場合、対象物の状態変化が引き起こさ

れるとし、この点は張（1998）と共通している。姚（2006、2008）によると、(14a、b)の文は動作主が「開けようとする」と「押そうとする」といった意志的動作をした結果、対象物である「寝室のドア」が「開く」という状態変化を実現する、またはしないという意味を表す。そして、この場合の「開く」「開かない」には可能の意味が含意されると言える。

しかし、姚（2006）は以下のような文例も挙げている。

(15) 私は何故か彼等がこの家に来るに違いないと確信した。頭を窓の下に隠し、耳を済ませた。砂を踏む足音と笑い声が近づき、裏の戸が開いた。

(15)の「開いた」は可能の意味解釈が成り立つとは言えない。確かに「戸が開いた」という「状態変化の実現」は動作主の意志行為を前提とするが、その状態変化は動作主の期待、あるいは待ち望んでいるものでなければならないと姚（2006、2008）は主張している。

以上のように、姚（2006、2008）は、有対自動詞が「無標（不）可能文」になる語用的条件について、1）動作主の意志的動作が「状態変化」の実現と関与する点、2）「状態変化」が動作主の待ち望むことでなければならないという点の2点を挙げている。このように変化の実現はどう動作主にとって、期待されている結果であるという語用論的意味が文脈的に明示されてはじめて可能の意味が生じる。状態変化の実現を妨げるものがなければ、動作主の期待が達成され、可能ということになるが、なんらかの妨げがあれば、期待が達成されず、不可能ということになると指摘している。

1.2.3.3 呂（2007、2010）

呂（2007、2010）は日本語の無意志自動詞を考察の対象とし、可能という観点から意味的な分析をしている。まず有対無意志自動詞について、動作主の意図を有する場合とそうでない場合はともに可能の意味が含意される。以下の例文が挙げられている。

(16) 女の方は高い声は出るが、低い声は出ない。

(16)は「出す」という動作主の意図的な動作によって、「出る」という結果が引き起

こされることを表す。つまり、動作主の意図がこの文に潜在するというわけであるので、可能の意味が含意されると呂（2007、2010）は論じている。

それに対して、「モノ」が主語になる場合には、動作主の意図は含意されない。

(17) 水と油はよく混ざらない。

(17) の文は「水と油が混ざる」という状態変化が実現しないこと、つまり「水と油」の本来的な性質を表す。この場合、動作主は想定されず、当然動作主の意図が潜在しない。呂（2007、2010）は、この種の文は動作主の意図は潜在しないが、可能の意味が含意されると述べている。

また、無対無意志自動詞も考察の対象として論じられている。無対無意志自動詞は動作主の意図が潜在する場合とそうでない場合がある。いずれの場合も可能の意味が含意されると呂（2007、2010）は主張している。

(18) 彼が参加すれば、物事がうまく運ぶ。

呂（2007、2010）では、(18) の文は動作主の意図が潜在しているとしている。「彼」の「参加する」という意志的な動作で、「物事がうまく運ぶ」の結果が達成されるので、「彼」に能力があることを意味すると呂（2007、2010）は述べている。

さらに、呂（2007）は動作主の意図が潜在しない場合として次の例を挙げている。

(19) ファクトリーゼロの製品は海水に浸っても錆びない樹脂製ベアリングタイヤを使用している。

(19) の文にはいかなる動作主の意図も潜在しない。この文は「樹脂製ベアリングタイヤ」の属性について述べ、「錆びる」という変化が実現不可能であることを表すだけである。いずれにせよ、この種の文は可能の意味が含意されると述べている。無意志自動詞には可能の意味が含意されるため、可能の助動詞「レル」「ラレル」と共起しないことが結論として導かれている。

以上のように、呂（2007、2010）は、無意志自動詞表現は動詞が有対か無対か、動作主の意図的関与があるかどうかにかかわらず、可能を含意することができる。また、無意志自動詞表現と中国語との対応関係については、以下のように示している。

- 1) 動作主の意図と動詞の種類によらず、無意志自動詞表現は中国語の可能表現に対応している。
- 2) 無意志自動詞表現の否定文は、可能の助動詞に合わず、もっぱら状態変化の「実現・不実現」に重点が置かれる可能補語と対応している。

第二章

自・他動詞の新たな分類

2.1 はじめに

1.2.3 の記述から分かるように、無標識可能自動詞と無標識可能形式を日本語学・対照言語学的に研究する人が多数いるが、それを分類する人はそれほど多くない。

本章の目的は、分類に関する先行研究の問題点を明らかにし、それを解決するために、可能という観点から自・他動詞の新たな分類を行うことにある。

2.2 先行研究とその問題点

上述したように、無標識可能自動詞と無標識可能形式に関しては、多数の研究がなされている（ヤコブセン 1989、乾 1991、青木 1997、長友 1997、張 1998、2012、龐 1999、都築 2001、大崎 2005、姚 2006、2008、呂 2007、2010、楠本 2009、大江 2010 など）。しかし、可能という観点から自・他動詞を分類するものは青木（1997）、長友（1997）、都築（2001）しか見当たらない。以下、この三人の分類表における問題点を検討する。

2.2.1 青木（1997）

青木（1997）は自動詞を、可能の接辞「(ら)れる」及び「ことができる」と共起するかどうかで、形態上分類を行っている。そして、主体の動作主性、意味役割、または動詞の意味特徴といった点から自動詞と可能形式との関わりを考察している。その結果は次の表 2-1 と表 2-2 となっている。

表 2-1 青木（1997：12、表 1）

	自動詞の例	(ラ)レル	コトガデキル
タイプ 1	上がる、止まる、集まる、動く、変わる	○	○
タイプ 2	受かる、助かる、育つ、増える、覚める	×	○
タイプ 3	決まる、載る、開く、閉まる、広まる	×	×
タイプ 4	4-1：見える、聞こえる 4-2：割れる、折れる、切れる、焼ける	×	×

表 2-2 青木 (1997 : 24、表 2)

	表現形式	動作主	主体の意味役割	自動詞の特徴
タイプ 1	(ラ) レル コトガデキル	有生	動作主 被動者	動作性が強い 意志表出が可能
タイプ 2	コトガデキル	有生	被動者	状態性が強い 意志表出が困難
タイプ 3	—	無生	被動者 (動作主の含意)	可能の含意 の可能性
タイプ 4	—	有生 無生	経験者 道具	可能の含意

タイプ 1: 「上がる、止まる、変わる、集まる、入る、動く、倒れる、落ちる (fall)、隠れる、消える (go out)、燃える、まとまる、歩く、走る、泳ぐ、駆ける、滑る、飛ぶ」などの自動詞はタイプ 1 に分類されている。これらの自動詞は「(ラ) レル」と「コトガデキル」の両方と共起するものである。それらが表す動作と状態の主体は有生であり、動作主及び被動者としての意味役割を持ち、意志性を表出することが可能である。

タイプ 2: 「助かる、治る、育つ、静まる、増える、覚める、伸びる、慣れる」などの自動詞はタイプ 2 に分類されている。これらの自動詞は「コトガデキル」のみと共起するものである。それらが表す状態の主体は有生であり、被動者としての意味役割を持ち、意志性が表出しにくい。

タイプ 3: 「決まる、載る、開く、閉まる、広まる、縮む、掛かる、混ざる、始まる、落ちる (come off)」などの自動詞はタイプ 3 に分類されている。これらの自動詞 (文) は可能の意味を含意するものである。それらが表す状態の主体は無生であるが、有生の動作主が文の背後に存在する。このような特徴を有する自動詞文は他動詞文の可能に置き換えても意味内容が変わらないので、可能の意味が絡んでいる。

タイプ 4-1: 「見える、聞こえる」のような自動詞はタイプ 4-1 に分類されている。この 2 つの自動詞は接辞-eru によって作られる主体に備わった知覚能力を表し、可能を含意するものである。特徴として、主体は有生としての経験者であることが挙げられている。

タイプ 4-2: 「折れる、削れる、切れる、売れる、割れる、破れる、焼ける、脱げる、縫える」のような自動詞はタイプ 4-2 に分類されている。これらの自動詞は、他動詞の「折

る、削る、切る、売る、割る、破る、焼く、脱ぐ、縫う」に接辞-eruを付加することによって作られる可能動詞と同形で、可能を含意しているものである。特徴として、主体は無生としての道具であることが挙げられている。

以上のように、青木は可能における自動詞を4つのタイプに分けて論じている。しかし、タイプ2の自動詞は、「コトガデキル」と共起するものであるとしているが、例文(1)(2)における「受かる、助かる」は、「コトガデキル」と共起せず可能の意味を含意する場合がある。つまり、タイプ2に属する自動詞はタイプ3のような特徴を有するのではないかと思われる。

- (1) 一生懸命勉強しなかったら、いい大学に(受からない/*受かることができない)。
- (2) どんな偉い先生に手術してもらっても、祖父は命が(助からない/*助かることができない)。

また、大江(2010)では、自動詞の「実る、咲く」は「コトガデキル」と共起する場合がある。モノ自体には「自律性」があれば、無生主語の「開く」「燃える」なども「コトガデキル」と共起できるようになるとしている。さらに、呂(2011)は、「実る、咲く」の他に、「生える、光る、輝く、溶ける」なども「コトガデキル」との共起が可能であると指摘している。

この大江(2010)と呂(2011)の指摘によれば、青木(1997)のタイプ3の「開く、燃える」などは「コトガデキル」と共起し、同じく無生主体を取る「実る、咲く、生える、光る」なども「コトガデキル」と共起する。つまり、「コトガデキル」としか共起しないものはタイプ2の動詞だけではなく、タイプ3の動詞なども含んでいると考えられる。

以上のことから分かるように、タイプ2の許容範囲が広がったが、場合によって、「コトガデキル」とは共起しないこともある。これは、「コトガデキル」の理論がまだ安定していないことを示唆している。

また、青木(1997)では、対のある自動詞と対のない自動詞については言及がないし、他動詞を考察していないので、まだ検討する余地があると思われる。

2.2.2 長友 (1997a、1997b)

初級の段階で日本語を学ぶ外国人に教える可能の表現形式として、長友 (1997a、1997b) には規則 1 と 2 が挙げられている。

規則 1 動詞の辞書形 + ことができる

規則 2 動詞 (u 動詞) 語幹 + eru

動詞 (ru 動詞) 語幹 + rareru

不規則動詞「来る」→「来れる」、「来られる」

「する」→「できる」

長友 (1997a) が分類表である表 3 を作成する際に、『走れメロス』、『雪国』から可能表現に使われている動詞を拾い出し、自動詞、他動詞を対応させながら、1) 規則 2 が適用できる動詞とできない動詞の別、2) 対応する自 (他) 動詞がある動詞、ない動詞の別、3) u 動詞と ru 動詞の別といった基準を用いている。

表 2-3 長友（1997a：4、＜分類表＞動詞例）

可能形がつくれるもの＋ 可能形がつくれないもの－ 対応する動詞がないものφ

分類 記号	自動詞 可能形	他動詞 可能形	自 動 詞 例	他 動 詞 例	備 考
A=規則 2 を適用できる動詞					
A1	＋	φ	会う －u	φ	該当なし
A2	＋	φ	いる －ru	φ	
A3	φ	＋	φ	もらう －u	
A4	φ	＋	φ	感じる －ru	
A5	＋	＋	() －u	() －u	
A6	＋	＋	() －ru	() －ru	
A7	＋	＋	立つ －u	立てる －u	
A8	＋	＋	隠れる －ru	隠す －ru	
B=規則 2 を適用できない場合がある動詞					
B1	－	＋	冷える －ru	冷やす －u	vi 辞書形 eru
B2	－	＋	見える －ru	見る －ru	vi 辞書形 eru
B3	－	＋	落ちる －ru	落とす －u	vi 辞書形 eru 以外
B4	－	＋	決まる －u	決める －ru	vi 辞書形 eru 以外
B5	－	＋	ひらく －u	ひらく －u	
B6	－	φ	暮れる －ru	φ	vi 辞書形 eru

この表 2-3 のように、長友（1997a、1997b）は A グループの動詞は規則 2 を適用できるが、B グループの動詞は規則 2 を適用できない場合があるとしている。

A グループの自動詞であるが、A1 では、「会う、歩く、はいる」を挙げ、「会う」の類語は、eru 可能形を作れるが、対応する他動詞はない。A2 では、「いる、よろける」を挙げ、「いる」の類語は、rareru 可能形が作れるが、対応する他動詞がない。A7 では、「立つ-立てる、乗る-乗せる、止まる-止める」を挙げ、「立つ-立てる」の類語は、対応する自・他動詞であり、両方とも可能形を作れ、u 自動詞と ru 他動詞の組み合わせでもある。A8 では、「隠れる-隠す、慣れる-慣らす、抜ける-抜く」を挙げ、「隠れる-隠す」の類語は、対応する自・他動詞であり、両方とも可能形が作れ、ru 自動詞と u 他動詞の組み合わせで

もある。

この A グループについて、自動詞は可能形を作る際に制限があり、いつでも作れるわけではない。なぜならば、動作主は、文中に明示されている場合も隠れている場合もあるが、動作主の意志が働いて、その動作の実現が可能であることを表す場合に、可能形が使える。主語が意志を持たない無生物で、状態性が強調されている場合には使えない。

次に、B グループの自動詞であるが、B1 では「増える-増やす、聞こえる-聞く、冷える-冷やす」を、B2 では「見える-見る」のみを、B3 では「落ちる-落とす」のみを、B4 では「早まる-早める、染まる-染める、決まる-決める」を、B5 では「ひらく-ひらく、増す-増す、とじる-とじる」を挙げている。それぞれの類語は、自動詞には可能形がなく、対応する他動詞には可能形がある。B6 では「冴える、暮れる、萌える」を挙げ、「暮れる」の類語は可能形がなく、対応する他動詞もない。

B グループについて、他動詞の可能形は作れるが、自動詞の可能形は作れない。なぜならば、自動詞の場合には、動作主の意志が動詞を左右しないからである。

以上のように、長友（1997a、1997b）は論じている。しかし、同じく人間の知覚能力を表し、可能の意味を含意する「見える」と「聞こえる」は音声的な違いによって、分けられている。また、B5 の「ひらく」については、動作主の意志が働いている場合は動詞の可能形を用いなくても可能の意味を持ち、「扉がひらく」という自動詞文も可能表現になるという記述がなされている。しかし、このような特徴を有する自動詞と表現には決して「ひらく」だけでなく、「分かる、慣れる、受かる、はいる、開く、上がる」なども含まれている。このような同じ特徴を持っている動詞は長友（1997a、1997b）では、音声的な違いによって区別され、異なる種類に扱われている。これは日本語学習者に理解されにくいであろう。したがって、分類表がまだ不十分だと思われる。

2.2.3 都築（2001）

都築（2001:223）では、「（張 1998）及び龐（1999）では、『可能の意味を含む自動詞』とそれ以外の自動詞の境界線がはっきりしていない」という問題点を提示している。この問題を解決するために、都築は、「可能の意味を含む自動詞」とそれ以外の自動詞の違いは何か、またどのような文型または表現の場合に「可能の意味を含む自動詞」になるのかを調べ、可能表現の日中対照データを作成している。

その日中対照データのうち、日本語データは『日本語基本動詞用法辞典』の見出し語の

「あ」から数えて 100 語の動詞をあげ、それぞれの自・他動詞の可能形と終止形を使った例文と、張（1998）や龐（1999）と都築（2001）の作例を合わせたものである。それに対して、中国語データの方は収集された日本語のデータを中国語母語話者 3 名に翻訳してもらって、自動詞の終止形を使った例文の中国語訳に、可能表現が使われている自動詞と可能表現が使われていない自動詞に分けられている。その結果は表 2-4 に示されている。

表 2-4 都築（2001：225-226、表 1）

(A)	中国語訳に可能表現が使われている自動詞	合う、上がる、揚がる、開く、空く、温まる、当たる、集まる、表れる、浮かぶ、受かる、動く、写る、映る、売れる、終わる、はいる
(B)	中国語訳に可能表現が使われていない自動詞	挨拶する、会う、遭う、上がる、飽きる、呆れる、握手する、明ける、遊ぶ、温まる、当たる（＝聞く）、集まる、余る、改まる、現れる、在る、有る、歩く、慌てる、安心する、生きる、行く、急ぐ、痛む、傷む、生まれる、運動する、影響する、起きる、遅れる、怒る、起こる、興る、はいる

そして、都築（2001）は（A）の中国語訳に可能表現が使われている自動詞を、「可能の意味を含む自動詞」であるとした場合、可能の意味を含む自動詞と可能の意味を含まない自動詞に分ける特徴として、次の 2 点を挙げている。

1. 「可能の意味を含む自動詞」の特徴：潜在的意志性がある
2. 可能の意味を含まない自動詞の特徴：意志性がない

都築では、上記の特徴を示したうえで、自動詞を「可能の意味を含む自動詞」かどうかで分類し、表 2-5 のように三つのグループに分けている。

表 2-5 都筑 (2001 : 229、表 2)

	自動詞の下位分類	特徴	例
1	可能形にできる自動詞	意志性がある	会う、上がる (B)、遊ぶ、集まる (B) 等
2	可能の意味を含む自動詞	潜在的意志性がある	合う、上がる (A)、開く、温まる、当たる、集まる (A) 等
3	可能形にできず、可能の意味も含まない自動詞	意志性が無い	遭う、飽きる、呆れる、明ける、余る、改まる等

「可能の意味を含む自動詞」は 2 グループに属する。ただし、都筑 (2001 : 229) は表 2-5 の 3 つのグループは、次のように区分することもできるとも述べ、この場合、無意志動詞の有対自動詞が「可能の意味を含む自動詞」に相当すると論じている。

自動詞の下位分類:

1. 意志動詞
2. 無意志動詞の有対自動詞
3. 無意志動詞の無対自動詞

しかし、「分かる」は無意志動詞であり、無対自動詞でもある。例文 (3) では日本語の新聞を理解しようとするという潜在的な意志を表出でき、可能の意味を含んでいると考えられる。(3') の中国語訳にも可能標識が見られる。

(3) 辞書を引かないと、日本語の新聞はほとんど分からない。

(3') 如果不查字典的话，日语报纸几乎看不懂。

例文 (3) の「新聞は分からない」は「新聞の内容が読み取れない」ということを意味している。そして、日本語の新聞を理解しようとするという潜在的な意志を表出でき、可能の意味を含んでいると考えられる。日本語には可能標識が見られないが、(3') の中国語訳には可能標識が見られる。このような特徴を有する無対自動詞は「分かる」だけとは限らず、無標識で可能を表すものには有対自動詞のみならず、無対自動詞も含まれている。

また、都築（2001）では、日本語データとして頭文字が「あ」になる自動詞のみを分類しているため、語彙的な限界性があると思われる。

以上のように、分類上や語彙上などには再考の余地が残されている。

2.3 自・他動詞の新たな分類

この節では、先行研究の問題点を解決するための新たな分類表を提示し、それについての説明を行う。

2.3.1 新たな分類表とその基準

本研究では分類の際には、自・他動詞が可能形と共起するかどうか、無標識で可能の意味を表せるかどうか¹⁰（分類表で無標識と略す）、形態的に対応する自動詞または他動詞があるかどうか、自動詞か他動詞かといった分類基準を用いる。これらの分類規則は、学習者が分類表には示されていない動詞に出会っても、どのタイプの動詞なのかを自ら判断できるように考慮したものであり、表 2-6 のように示すことができる。

表 2-6 自・他動詞の新たな分類表

グループ	タイプ	可能形	無標識	対応	自他	動詞例
意志動詞 ¹¹	1	○	×	×	他	書く、話す、弾く、読む
	2	○	×	×	自	走る、眠る、いる、行く
	3	○	×	○	他	開ける、始める、見る、聞く
	4	○	× ¹²	○	自	動く、集まる、上がる、止まる
無意志動詞	5	×	○	×	自	降る、吹く、曇る、晴れる
	6	×	○	×	自	分かる、慣れる、受かる
	7	×	○	○	自	開く、始まる、上がる
	8	×	○	○	自	見える、聞こえる

¹⁰ 有標識動詞であり、しかも無標識可能動詞にもなりうるものに関しては、今後の課題とする。

¹¹ 意志動詞と無意志動詞の判断は青木（2008：56-57）にしたがう。

¹² これらの動詞は無生主体を取る無意志動詞としても用いられる。

2.3.2 新たな分類表における先行研究との違い

2.3.2.1 青木（1997）との違い

表 2-6 と青木（1997）との違いとして、以下の 3 点が挙げられる。

- ①青木（1997）が分類したタイプ 3 の自動詞も「ことができる」と共起するので、タイプ 2 の許容範囲はかなり広いと考えられる。表 2-6 では、この「ことができる」は分類基準としていない。
- ②青木（1997）では、対のある自動詞と対のない自動詞については言及がない。表 2-6 では、自動詞には対応する他動詞があるかどうかを示してある。
- ③青木（1997）では他動詞は考察の対象外であるが、表 2-6 ではそれを対象としている。

2.3.2.2 長友（1997a、b）との違い

表 2-6 と長友（1997a、b）との違いとして、以下の 2 点が挙げられる。

- ①長友（1997a、b）では、可能の意味を含むとされる自動詞が音声的な違いによって異なる種類に扱われている。表 2-6 では、この点については特に見ていない。
- ②長友（1997b）では、「ひらく」は可能形を用いなくても可能の意味を持つ自動詞で、「扉がひらく」という自動詞文も可能表現になるとしているが、このような特徴を有する自動詞は「ひらく」だけとは限らない。表 2-6 では、それ以外の自動詞も対象としている。

2.3.2.3 都築（2001）との違い

表 2-6 と都築（2001）との違いとして、以下の 3 点が挙げられる。

- ①都築（2001）では、無意志動詞の有対自動詞が「可能の意味を含む自動詞」に相当すると論じているが、これは無意志動詞であり、無対自動詞でもある「分かる、降る」などは、可能の意味を含んでいる。したがって、表 2-6 では無対自動詞も考察の対象である。
- ②都築（2001）が分類した自動詞は頭文字が「あ」のものだけである。表 2-6 では、都築（2001）以外の多くの自動詞が考察の対象とされている。
- ③都築（2001）では他動詞は考察の対象外であるが、表 2-6 ではそれを対象としている。

2.4 分類方法

表 2-6 から分かるように、8 つのタイプは意志動詞と無意志動詞のグループに分けることができる。意志動詞のグループは可能形と共起するが、無標識では可能の意味を表すことはできない。つまり、可能形を使って可能が表示される。タイプ 1~4 がそうである。一方、無意志動詞のグループは可能形とは共起しないが、無標識可能自動詞と無標識可能形式になり得る。つまり、可能形を使わずに可能の意味が表示される。タイプ 5~8 がそうである。

2.4.1 意志動詞のグループ

タイプ 1 には「書く、話す、弾く、読む、食べる」など、タイプ 2 には「走る、眠る、行く、飛ぶ、泳ぐ」など、タイプ 3 には「開ける、始める、見る、聞く」など、タイプ 4 には「動く、集まる、上がる、止まる」などの動詞が含まれる。各タイプの例文は、表 2-7 のとおりである。

表 2-7 タイプ 1~4 の例文とその特徴

	例文	表現特徴
タイプ 1	私は英語が話せる この茸は食べられる	有生物の能力 無生物の属性
タイプ 2	私はまだ眠れない この車は少しのガソリンで 10 キロ走れる	有生物の状態 無生物の性能
タイプ 3	私はこのドアが開けられない 私は時間がなくて、テレビが見られない	有生物の能力 有生物の状態
タイプ 4	学生は無料で映画館に入れる 車は急に止まれない	有生物の許可 無生物の性能

タイプ 4 の動詞は有生主体を取る意志動詞の用法の他に、タイプ 7 のような無生主体を取る無意志動詞の用法も併せ持つ。この点について、青木 (2008 : 61) は有生主語の行為、動作を述べる場合には「(ら)れる」「ことができる」と共起するが、その主語の特徴は無生物となり、可能の表現形式を持たないと述べている。その例文として、表 2-8 が挙げられる。

表 2-8 可能形を持たない場合のタイプ 4

	誤用文→正用文	可能形にできない理由
タイプ 4	みかんが袋に入れる (→入る) 切符が集まれる (→集まる)	無生物主体+無意志動詞

以上のタイプはいずれも「意向形・命令形」などを持つ意志動詞であり、有標識可能自・他動詞でもある。主体が有生物と無生物両方になれる。有生物の場合は主体の能力や状態などを表し、無生物の場合は主体としての意志表出が困難で、物の属性や性能などを表す。

2.4.2 無意志動詞のグループ

タイプ 5 には「降る、吹く、曇る、明ける」など、タイプ 6 には「分かる、慣れる、受かるなど」、タイプ 8 には「見える、聞こえる」などの動詞が含まれる。その可能の意味を表す例文として、表 2-9 が挙げられる。

表 2-9 タイプ 5、6、8 の例文とその中国語訳

	例文	下線部の中国語訳
タイプ 5	しばらく雨は <u>降らない</u> しばらく風は <u>吹かない</u>	不会下・下不了 不会刮・刮不了
タイプ 6	私は英語の新聞が <u>分かる</u> 私はこの生活には <u>慣れる</u>	能读懂・读得懂 能适应・适应得了
タイプ 8	山・目が <u>見える</u> 音・耳が <u>聞こえる</u>	能看到・看得到 能听到・听得到

タイプ 5 の「降らない」「吹かない」は「雨が降る、風が吹く見込み（可能性）がない」ということを示している。これらの動詞は自然現象を表すもので、可能形とは共起しないが、可能の意味を帯びていると考えられる。副詞「たぶん、きっと、決してなど」を付けて表現すれば、可能の意味が明確に読み取れる。

タイプ 6 の「分かる」「慣れる」は「新聞の内容が読み取れる」「生活に馴染める」ということを意味している。これらの動詞は人間の状態を表すもので、可能形とは共起しないが、可能の意味を帯びていると考えられる。

タイプ8の「目が見える」「耳が聞こえる」¹³は目と耳の機能がよく働いているということを行っている。この場合の「見える」「聞こえる」はいわゆる人間の知覚能力を表すものである。一方、「山が見える」「音が聞こえる」は「山が自然に目に映る」「音が自然に耳に入る」という自発の意味を表している。この場合の「見える」「聞こえる」は「見られる」「聞ける」との交換性があるので、タイプ7の動詞の用法（後述）とかなり近似しているものである。

表2-9から分かるように、タイプ5、6、8では日本語の例文に可能標識はないが、対応する中国語では可能助動詞の「会」「能」、可能補語の「下不了」「刮不了」「读得懂」「适应得了」「看得到」「听得到」が使われている³⁾。つまり、この3つのタイプは可能の意味を、日本語は可能標識を使わず自動詞の持つ語彙的な意味で表し、中国語は可能標識を使って表すと言える。

一方、タイプ7には、「開く、始まる、見つかる、上がる」などの動詞が含まれる。これらの動詞に対する中国語訳に可能表現が使われがちな文型について、表2-10¹⁴のように都築（1999）は、自・他動詞ペアになっている動詞は自動詞の終止形の方を使うと説明している。

表2-10 中国語訳に可能表現が使われがちな文型

(理由) て/ので、(否定形)。」、「～が、(否定形)。」、「～れば、(肯定形)。」	
意味	動作の結果が可能かどうか
例文	ちっとも勉強しないので、成績が <u>上がらない</u> [上不去]
	ビンのふたがかたくて、 <u>開かない</u> [打不开]

([] 内は下線部の中国語訳を示す)

表2-10の例文は状態変化が動作主の思い通りに実現できるかどうかを表し、「結果可能表現」と呼ばれることもある。「上がる、開く」の自動詞文を「上げられる、開けられる」の他動詞文と置き換えても意味内容は変わらないので、可能の意味が絡んでいると考えられている。ただし、このような表現を表そうとすれば、少なくとも潜在的な意志や動作主

¹³ 「見える」「聞こえる」は「物が自然に目に映る」「音が自然に耳に入る」という自発の意味を表す場合もある。この場合の「見える」「聞こえる」は「見られる」「聞ける」との交換性があるので、タイプ7の動詞とかなり近似している。

¹⁴ 表2-10は筆者が都築（2001）からまとめたものである。

を感じさせる環境「バ構文、ノデ構文、ガ構文など」、あるいは副詞「なかなか、どうしてもなど」が必要になる。

表 2-10 の例文が表す可能の意味は、自動詞自身の語彙の意味ではなく、それらの自動詞文の構文形式によって生ぜしめられたものである（張 2012 : 64）。自動詞自身の語彙の意味ではなく、ある特定の構文下で生じたものである。日本語の例文に可能標識は見られないが、対応する中国語では可能助動詞の「能」と可能補語の「上不去」「打不开」が使われている。前者は無標識で表現するのに対し、後者は有標識で表現する。

以上から分かるように、タイプ 5~8 の動詞はいずれも日本語では有標識可能形式にできないが、中国語では可能表現にできる無意志動詞であり、無標識可能自動詞でもある。ただし、タイプ 7 の動詞は特定の文脈下か副詞と組み合わせて使われるときにのみ、可能の意味が出てくる。一方、タイプ 5、6、8 に属する動詞はそれ自体が可能の意味を含意している。つまり、可能の意味を発生させるために環境や副詞による文脈依存性が比較的強いタイプ 7 と、文脈依存性がそれほど強くないタイプ 5、6、8 があると言えるわけである。

2.5 本章のまとめ

本章は先行研究を踏まえ、可能という観点から自・他動詞の新たな分類を行うことを目的とした。明らかにされた先行研究の問題点を解決するために、自・他動詞が可能形と共起するかどうか、無標識可能自動詞と無標識可能形式になるかどうか、対応する動詞があるかどうか、自動詞か他動詞かといった基準で、新たな分類表の作成を試みた。

この分類を中国語母語話者における自・他動詞の習得状況と使用傾向を調べる際に応用しようとするれば、どのグループとタイプの動詞が習得されにくいのか、または使用されにくいのかといったことが明らかになる。また、可能という観点から自・他動詞の指導法を提案するときにも役立つのであろう。

第三章

アンケート調査の方法

3.1 調査対象及び期間

中国語母語話者における自・他動詞の習得過程(研究目的の2~4)などを調べるために、アンケート調査を行った。この章では第四章~第六章で行われたアンケート調査の調査方法などについて紹介する。

2012年5月21日から6月22日まで中国黒竜江省のA大学外国語学院日本語学部でアンケート調査を実施した。このA大学は1947年に創立された黒竜江省管轄の重点総合大学である。

アンケート調査は、A大学外国語学院日本語学部で日本語を学んでいる一年生、二年生と三年生を対象者とする調査データを収集するために行った。一年生49名、二年生63名、三年生58名¹⁵、合計170名の学生から協力を得ることができた。四年生は就職活動に参加していたり、卒論を執筆していたりしたため、四年生向けの調査を実施することはできなかった。アンケート調査に答える際に、学生たちには辞書などを引かないように注意を与えてもらった。

3.2 調査項目と手順

アンケートは論文末の資料に示したとおりであるが、三つの項目からなる。一つ目は、対象者の属性に関わる質問項目である。二つ目は、学生の習得状況を調べたり誤用を収集したりするための調査文に関わる質問項目である。三つ目は、その回答に関する自由記述と連絡先である。

一つ目の対象者の属性については、学年、民族、性別、年齢、日本語学習歴、来日経験、日本語能力試験の合格級、日本語以外の言語能力について尋ねた¹⁶。このうち、特に重要なのは学年、日本語学習歴、来日経験、日本語能力試験の合格級、民族である。学年については、学年を区別するために尋ねる。日本語学習歴については、大学に入る前から日本語を既に勉強し始めた学生であれば、普通の学生に比べると1年間から2年間学習時間が多いため、日本語の能力に差があることが予想され、日本語への理解も違ってくると思われる。そのために、日本語学習歴を聞いている。来日経験については、学習環境の違いが

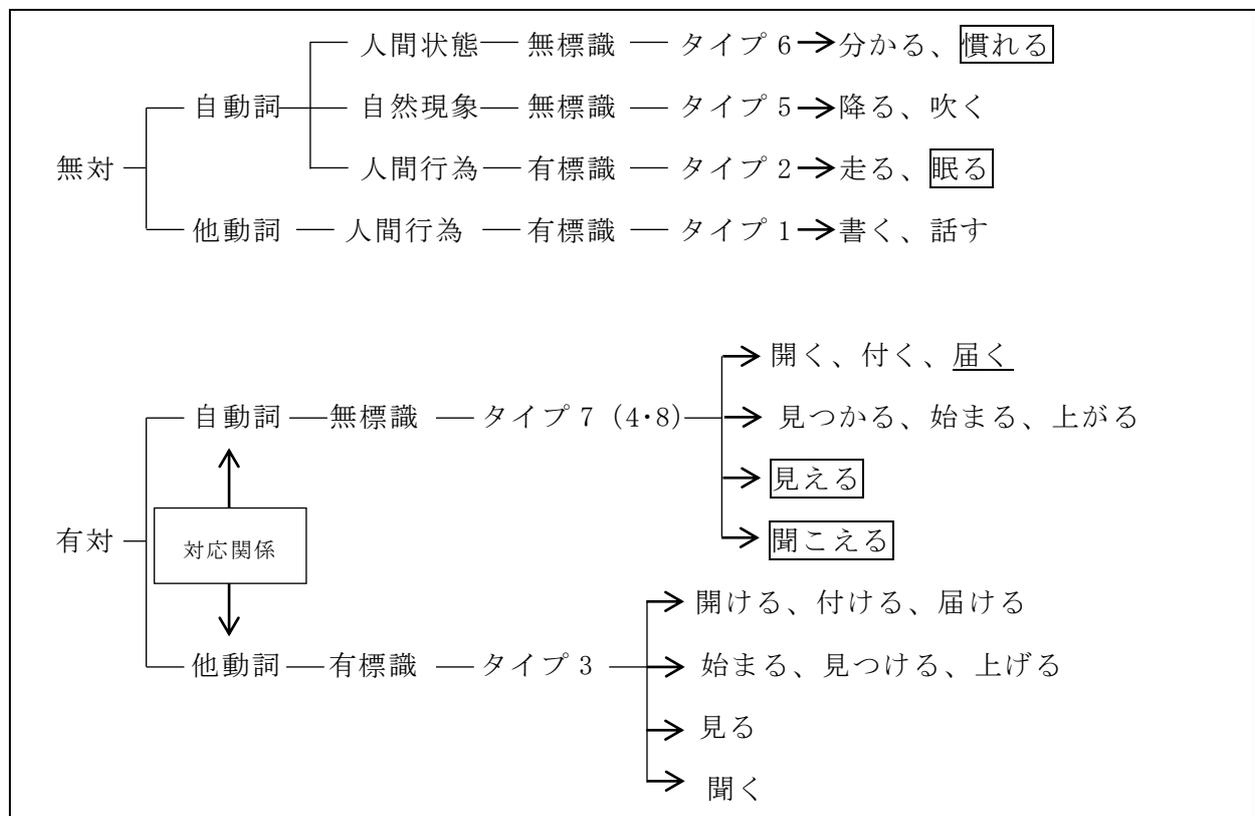
¹⁵ 三年生の58名は回答が不適切な5名を対象者を除外した人数である。

¹⁶ 性別、年齢、日本語能力試験の合格級、日本語以外の言語能力といったデータは今後の課題として考察する。

あれば、調査文への理解が変わる可能性があるので、調査項目に含めた。日本語能力試験の合格級については、取得した級によって自・他動詞の理解に差が出てくるかどうかを考察するためである。民族については、母語干渉が日本語の自・他動詞にあるかどうかを考慮してのことである。

二つ目の、学生の習得状況を調べたり誤用を収集したりするための調査文は次の手順で作成した。国際交流基金・日本国際教育協会（2002）から旧 3、4 級¹⁷の動詞を抽出し、一年生にとって既習した最も基本的な範囲から、第二章での自・他動詞の新たな分類である表 2-6 の基準により動詞を選別する。選別された動詞とその基準は表 3-1 のとおりである。

表 3-1¹⁸ 動詞の選定とその基準



{ 下線のあるものは旧 2 級の動詞（1 個）、枠のあるものは旧 3 級の動詞（4 個）、それ以外のものは旧 4 級の動詞（19 個）である。 }

¹⁷ 2010 年からは新しい日本語能力試験が導入された。旧試験では、試験に出る漢字や語彙、文法項目のリストが掲載された『日本語能力試験出題基準』が出版されていたが、新試験では『日本語能力試験出題基準』が非公開になっている。また、旧試験の 3、4 級と新試験の N4、N5 とは、レベルや試験科目などにおいてほぼ対応している。詳細は日本語能力試験ホームページ <http://www.jlpt.jp/faq/index.html> を参照されたい。

¹⁸ 有対自・他動詞は統語的な対応関係が成り立たない場合がある。例えば、知覚能力を表すタイプ 8 の「見える、聞こえる」と、原因が自分自身にある「開ける、始めるなど」はそれである。この場合の自・他動詞を表 3-1 には示さず、調査文とともに表 3-2 に示す。また、タイプ 7 の用法を持たないタイプ 4 は考察の対象外である。

表 3-1 に示したように、動詞選定にあたっては旧 4 級の語彙を優先させることによって 24 個の動詞が調査動詞として選ばれた。この 24 個の動詞のうち、自動詞が 14 個、他動詞が 10 個である。その具体的な選定基準は以下のとおりである。

まず、無対自・他動詞についてであるが、無対自動詞は人間行為、人間状態および自然現象を表すものに三分した。無対他動詞の場合は、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い（早津 1995）ので、分類は人間行為を表すもののみとした。無標識に関しては、人間状態を表す自動詞である「分かる、慣れる」と、自然現象を表す自動詞である「吹く、降る」とが、ともに可能形と共起せず可能の意味を含意し、無標無対の条件を満たすので、調査動詞として選ばれた。一方、有標識に関しては、人間行為を表す自動詞である「走る、眠る」と、同じく人間行為を表す他動詞である「書く、話す」とがともに可能形と共起し、有標無対の条件を満たすので、調査動詞として選ばれた。

次に、有対自・他動詞についてであるが、形態上の対応規則によって、次の 4 つに下位分類した。

- | | | | | |
|------------------|---------|---------|-----------|----|
| (1) aru-eru | 始まる-始める | 上がる-上げる | 見つかる-見つける | など |
| (2) u (≠ru) -eru | 開く-開ける | 付く-付ける | 届く-届ける | など |
| (3) ieru-ru(≠u) | 見える-見る | 煮える-煮る | | など |
| (4) eru-u (≠ru) | 聞こえる-聞く | 欠ける-欠く | 碎ける-砕く | など |

他動詞はすべて可能形と共起するが、自動詞は可能形と共起するものもあれば、共起しないものもある。その中から可能形を使わずに可能の意味を構文的に表せる自動詞を選別し、最終的に「始まる-始める」「上がる-上げる」「見つかる-見つける」「開く-開ける」「付く-付ける」「届く-届ける」「見える-見る」「聞こえる-聞く」といった 8 ペアを調査動詞として選んだ。

以上の方法によって、調査に使われる動詞が定まった。第四章は「開く-開ける」「始まる-始める」「見える-見る」「聞こえる-聞く」のように、4 つの分類の中から 1 つのペアを取り出して調査する。第五章は分類 (1) の「始まる-始める」「上がる-上げる」「見つかる-見つける」と、分類 (2) の「開く-開ける」「付く-付ける」「届く-届ける」を調査する。第六章は無対自・他動詞、すなわち自動詞の「分かる、慣れる」「吹く、降る」「走る、眠る」と、他動詞の「書く、話す」を調査する。

最後に、これらの動詞を使った調査文を作成する。作成した調査文すべてを日本語母語話者（協力者は30名、社会人が10名、大学生が20名である）に確認してもらった。おかしいと思われる例文を改正した。自然な日本語表現と見なされている例文をアンケート調査の調査文にした。それらは次の表3-2に示す。

表 3-2 調査文

	表現	動詞	調査文
第四章 (資料1)	有対他動詞の みが成り立つ	開ける	手を怪我したので、ドアが <u>開けられない</u> 。
		始める	頭が痛いので、勉強が <u>始められない</u> 。
	有対自動詞の みが成り立つ	見える	部屋が暗いので、目が見えない。
		聞こえる	年のせいで、耳が <u>聞こえない</u> 。
	有対自・他 動詞の両方 が成り立つ	見える/見る	曇りなので、富士山が <u>見えない/見られない</u> 。
		聞こえる/聞く	ラジオの電波が弱いので、ニュースが <u>聞こえない/聞けない</u> 。
		開く/開ける	鍵の調子が悪いので、ドアが <u>開かない/開けられない</u> 。
		始まる/始める	時間にならないので、授業が <u>始まらない/始められない</u> 。
第五章 (資料2)	有対自・他 動詞の両方 が成り立つ	開く/開ける	鍵の調子が悪いので、ドアが <u>開かない/開けられない</u>
		付く/付ける	電球が切れているので、電気が <u>付かない/付けられない</u>
		届く/届ける	避難所への道路が破壊されたので、荷物が <u>届かない/届けられない</u>
		見つかる/見つける	道に迷ってしまったので、家が <u>見つからない/見つけられない</u>
		始まる/始める	時間にならないので、授業が <u>始まらない/始められない</u>
		上がる/上げる	首が痛いので、頭が <u>上がらない/上げられない</u>
第六章 (資料3)	無対自動詞の みが成り立つ	眠る	外がうるさいので、眠ろうとしても <u>眠れない</u> 。
		走る	赤ちゃんなので、まだ <u>走れない</u> 。
	無対他動詞の みが成り立つ	書く	中国語を勉強したことがないので、漢字が <u>書けない</u> 。
		話す	私は中国人ではないので、中国語が <u>話せない</u> 。
	無対自動詞の みが成り立つ	分かる	辞書を引かないと英語の新聞はほとんど <u>分からない</u> 。
		慣れる	どんなに長く住んでいても、この生活には <u>慣れない</u> 。
	無対自動詞の みが成り立つ	吹く	明日はいい天気なので、たぶん強風が <u>吹かない</u> 。
		降る	日照りが続いているので、たぶん大雨が <u>降らない</u> 。

三つ目の自由記述と連絡先については、対象者がどのような基準で答えているのか、またどのような疑問があるのか、必要な情報として記述してもらった。その記述された内容が判明できない場合を考慮して、直接連絡が取れるように連絡先をも記入してもらった。

3.3 調査対象者の属性

調査対象者の属性について整理しておく。調査表では学年、民族、性別、年齢、日本語学習歴、来日経験、日本語能力試験の合格級、日本語以外の外国語能力を尋ねているが、それぞれの項目を見ていこう。

まず、学年については前述したように調査する際に一年生 49 名、二年生 63 名と三年生 58 名を合わせて 170 名の学生からの協力を受けた。その人数を改めて次の表 3-3 に示す。

表 3-3 対象者の人数

学年	人数
一年生	49 名
二年生	63 名
三年生	58 名
総人数	170 名

日本語学習歴については表 3-4 のとおりである。

表 3-4 対象者の日本語学習歴

学年	日本語学歴	人数
一年生	1 年未満	全員
二年生	1 年から 2 年	全員
三年生	2 年から 3 年	全員

表 3-4 に示したとおり、日本語学習歴は一年生全員が 1 年未満、二年生全員が 1 年から 2 年、三年生全員が 2 年から 3 年である。一年生から三年生までのすべての学生が大学に入ってから日本語を学び始めたことが分かる。

来日経験については、日本に来たことがある人が一人もいないので、表には示さない。
日本語能力試験の合格級については、表 3-5 のとおりである。

表 3-5 対象者のレベル

学年	日本語能力資格	人数
一年生	なし	49 名
二年生	N2	5 名
	なし	58 名
三年生	N1	4 名
	N2	31 名
	なし	23 名
合計		170 名

表 3-5 に示したとおり、日本語能力試験に合格した一年生はゼロであるので、N3 以下のレベルで初級日本語学習者だと考えてよい。二年生は日本語能力試験 N2 に合格した人が 5 名いる。二年生 63 名のうち 5 名が日本語能力試験 N2 に合格したのは二年生の前期（2011 年 12 月）であった。日本語能力試験にまだ合格していない学生も 58 名いるが、これらの学生はその時に N1 か N2 を受験して不合格になった学生である。したがって、日本語能力は多くの学生が N2 程度のレベルを持ち、中級日本語学習者だと考えてよい。また、三年生は日本語能力試験 N1 と N2 に合格した人が 35 名いる。それぞれ N1 級 4 名、N2 級 31 名である。三年生 58 名のうち 35 名が日本語能力試験に合格したのは二年生の後期（2011 年 7 月）か三年生の前期（2011 年 12 月）であった。日本語能力試験にまだ合格していない学生も 23 名いるが、これらの学生はその時に N1 か N2 を受験して不合格になった学生である。したがって、日本語能力は多くの学生が N2 以上のレベルを持ち、上級日本語学習者だと考えてよい。

民族については、表 3-6 のとおりである。

表 3-6 対象者の民族とその人数

学年	民族	人数
一年生	漢族	44 名
	満州族	1 名
	朝鮮族	2 名
	モンゴル族	1 名
	白族	1 名
二年生	漢族	59 名
	満州族	3 名
	瑶族	1 名
三年生	漢族	56 名
	満州族	1 名
	モンゴル族	1 名
合計		170 名

表 3-6 に示したとおり、一年生 49 名のうち 44 名の学生が漢族であり、他には朝鮮族 2 名、満州族、モンゴル族と白族が 1 名ずつである。二年生 63 名のうち 59 名の学生が漢族であり、他には満州族 3 名、瑶族が 1 名である。三年生 58 名のうち 56 名の学生が漢族であり、他には満州族とモンゴル族が 1 名ずつである。一年生、二年生と三年生の母語はほとんど中国語であるが、少数民族の言語ができる学生もいる。この少数民族の学生に確認したところ、みんな漢族の人と同じな中国語の言語能力を持っていると分かった。

また、性別と年齢についてであるが、表 3-7 と表 3-8 に示す。

表 3-7 対象者の性別とその人数

学年	性別	人数
一年生	男性	7 名
	女性	42 名
二年生	男性	11 名
	女性	52 名
三年生	男性	5 名
	女性	53 名
合計		170 名

表 3-8 対象者の年齢

学年	人数	平均年齢
一年生	49 名	20 歳
二年生	63 名	21.3 歳
三年生	58 名	22 歳

表 3-7 に示したとおり、一年生 49 名のうち男性が 7 名であり、女性が 42 名である。二年生 63 名のうち男性が 11 名であり、女性が 52 名である。三年生 58 名のうち男性が 5 名であり、女性が 53 名である。女性の総人数は男性の 6.4 倍であり、圧倒的に多い。しかし、女性が多いのは決して珍しいことではない。どの大学においても文系で女性の姿が多く見られる。表 3-8 のように、平均年齢だけを披露している。その内訳は、一年生 49 名の平均年齢が 20 歳、二年生 63 名の平均年齢が 21.3 歳、三年生 58 名の平均年齢が 22 歳である。

最後に、日本語以外の言語能力については、その問題では英語と答えた人がほとんどである。

3.4 分析方法

第四、五、六章は、調査データを整理する。そのデータにしたがい、一年生、二年生と三年生の習得状況と誤用原因を個別的に分析する。データ分析の際に、統計的な方法を用

いる。その統計手法の調査計画は章ごとに記述する。誤用の原因を、調査対象者の母語や使用している教科書などを交えながら探っていく。正用と誤用の基準については、日本人に認められた日本語表現にしたがう。それは、この結果を自然な日本語と見なすからにほかならない。

第四章

有・無標識可能表現における 有対自・他動詞の習得

4.1はじめに

有対自・他動詞の区別とその使用は、日本語学習者にとって習得が困難であるとされている。例えば、市川（1997:171）では（1）と（2）のような誤用例を挙げ（→正用）、「見える」と「見られる」、「聞こえる」と「聞ける」の使い分けには混同によって生じた誤用が見られると述べている。

- （1）人口にたいへん高い「すぎ」というの（→という）木がありました。韓国には（→では）そう高い木はとともみえませんです（→見られません）。
- （2）もしもし、電話が聞けません（→聞こえません）。

有対自・他動詞の使用において、日本語母語話者は自動詞によるナル的表現を好むのに対して、日本語学習者は他動詞によるスル的表現を好んでいる（小林 1996:55、姚 2004:284）。そのため、「いくら押しても、ドアが開けられない」のように自動詞と対応する他動詞の可能形を使って語用上不適切な文を作ってしまうがちである（楠本 2009:66）。

以上に加えて、（3）と（4）のような、可能形と共起しない自動詞に可能形を付加する形態的誤用を犯す学習者が多い（姫野 2001:57）。

- （3）消しゴムで字が消えられた。（消える・可能形）
- （4）戸があけた。（あく・可能形）

1970年代に中間言語（interlanguage）という概念が Selinker（1972）によって提唱されて以来、第二言語¹⁹習得研究は誤用だけでなく正用も含め、学習者がどのように目標言語を用いているのか、その全体像を分析する中間言語に関する研究が主流になってきた。しかし、これまでの有対自・他動詞に関する第二言語習得研究を見る限り、学習者の視点から中間言語の様相を論じたものは少ない。しかもその多くは、有対自・他動詞の基本的用法を中心としたものであり、有対自・他動詞の派生的用法²⁰を中心に論じたものは小林（1996）と封（2007）しか見当たらない。ただし、小林（1996）と封（2007）は日本語学習者にお

¹⁹ 本研究では、「第二言語」という用語は特別に比較する場合を除いては、「外国語」と区別しない。

²⁰ 有対自・他動詞の基本的・派生的用法については、中石（2002:386-387）で詳しく説明されているが、本研究での有対自・他動詞の派生的用法は、有・無標識可能表現における有対自・他動詞の用法を表す。

ける誤用と習得状況しか扱っておらず、習得過程などには着目していない。

中国語を母語 (native language) とする日本語学習者にとっても、上述のような有対自・他動詞の習得は、最も難しい学習項目の1つであると言ってもよい。本章の目的は、中国黒竜江省のA大学外国語学院日本語学部で日本語を学ぶ一、二、三年生を対象に行ったアンケート調査をもとに、有・無標識可能表現における有対自・他動詞²¹に焦点をあて、文法的な側面から有対自・他動詞を使用・習得する際の状況だけでなく、その推移などをも明らかにすることにある。

4.2 先行研究とその問題点

日本語学習者を対象に、有対自・他動詞の習得を考察した主な先行研究としては、テストによる調査の守屋 (1994)、小林 (1996)、封 (2007)、作文資料による調査の岡崎・張 (1998)、発話資料による調査²²の中石 (2005)、伊藤 (2012) がある。そして、作文資料と発話資料による調査を併用した姚 (2004) と、テストと作文資料による調査を併用した李 (2008) がある。調査方法に違いがあるとはいえ、守屋 (1994)、小林 (1996)、姚 (2004)、封 (2007)、李 (2008)、伊藤 (2012) では、「自動詞の使用と習得が難しい」という共通の結果が得られている。さらに、小林 (1996) では「行為の結果の状態を表す自動詞の運用が難しい」、封 (2007) では「可能の意味を含む自動詞の習得が難しい」という結論が得られている²³。しかし、これらの研究は、有対自・他動詞の基本的用法を中心とした調査がほとんどであり、有対自・他動詞の派生的用法を中心とした調査は小林 (1996) と封 (2007) だけである。以下、この二人の研究とその問題点について詳しく検討する。

²¹ 本章では、有・無標識可能有対自・他動詞の表現形式を互いに置換することが可能と不可能な表現、すなわち有対自・他動詞の両方が成り立つ表現 (可能な場合)、有対他動詞のみが成り立つ表現と有対自動詞のみが成り立つ表現 (不可能な場合) を総称して、有・無標識可能表現という。有・無標識可能有対自・他動詞は、無標識可能有対自動詞とそれに対応する有標識可能他動詞の総称である。

²² 発話資料による調査とは、「KY コーパス」という発話データを用いて分析するものである。

²³ 西尾 (1978:174) によれば、有対自動詞は主体に変化を生ずる「結果動詞」である。また、早津 (1987b:83) でも、有対自動詞は働きかけによって引き起こしうる非情物の変化を表すものであるとされている。さらに、このような状態変化を表す有対自動詞を可能の観点から考察した研究 (張 1998、龐 1999) などでは、有対自動詞表現が可能の意味を含意できると指摘されるように、可能の意味を含む自動詞表現は結果の状態を表す自動詞表現と近似した用法であるので、同じ用法として見なしてよいであろう。

4.2.1 小林 (1996)

小林 (1996) では、有対自動詞の結果状態を表す表現に焦点をあて、テスト1「短文での自動詞表現」、テスト2「複文での結果表現」、及びテスト3「あく、あける、あけられるによる談話場面での使用」といった調査が行われている。テスト1と2の受験者は中上級レベルの学習者26名、テスト3の受験者は中上級レベルの学習者68名（中国語話者25名、韓国語話者20名、スペイン語話者5名、英語話者4名、日系ポルトガル語話者3名、その他11名）である。

テスト1とテスト2の結果は、日本語学習者は語彙と活用が習得できているにもかかわらず、ヴォイスにおける適切な自・他動詞の使い分けが困難であることを示している。また、テスト1、2、3の相互関係を分析し、行為の結果の状態を表す場合、日本語母語話者は、自動詞表現を使用する傾向が強いが、日本語学習者は自動詞の使用は少なく、他動詞か他動詞可能形を使用する傾向が強いということを明らかにしている。

そして「学習者にとって相対自動詞によって、行為の結果の状態を表現することが難しいことが明らかになった。特に、条件文の様々な接続表現の後続文として、対象が主語になる場合の自動詞表現は習得されにくい。特に、談話レベルで自動詞を運用することは非常に難しい」という結論を導き出している。

しかし、小林 (1996) には問題点が3つあると思われる。

- (1) 明らかになったのは「あく-あける」の使用状況と習得状況のみである。他の有対自・他動詞の使用状況と習得状況については論じられていない。
- (2) 調査対象者は学習環境や母語などが違った JSL 学習者だけであり、JFL 学習者向けの新たな調査も必要である²⁴。
- (3) 中上級レベルの中国語話者学習者についても触れられてはいるが、また初級と上級レベルの学習者における動詞の使用状況と習得状況をも解明する必要がある。

4.2.2 封 (2007)

封 (2007) では、日本語を700～800時間学習した大学三年生の中国語話者32名を対象に、可能の意味を含む有対自動詞における形態的対立に焦点をあて、有対自動詞を分類し、その習得状況に関する調査が行われている。その分類は、次のとおりである。

²⁴ JSL は第二言語としての日本語を、JFL は外国語としての日本語を表す。

1. 有対自・他動詞:

A 類 自動詞の語末が/-u/で、他動詞の語末が/-eru/ 例:あく-あける、つく-つける

B 類 自動詞は文脈によって、主語が有情物と無情物と両方使われうる（自動詞の語末が/-aru/で、他動詞の語末が/-eru/） 例:あがる-あげる、あつまる-あつめる

C 類 可能の意味を含む 例:見える-見る 折れる-折る

D 類 自他同形 例:ひらく-ひらく、もつ-もつ

E 類 上記以外 例:伸びる-伸ばす、おちる-おとす

2. 無対他動詞:

例:読む、食べる

3. 無対自動詞:

A 類 主語が無情物 例:晴れる、明ける

B 類 主語が有情物 例:寝る、出かける

そして、調査結果として、有対自動詞に比べ、有対他動詞の正解率が全体的に高いことを示したうえで、自動詞の習得状況を次のようにまとめている。

1. 有対自・他動詞:

A 類における自動詞の習得が最も難しい。

B 類における自動詞について、主語が有情物である場合は習得が易しく、主語が無情物である場合は習得が難しい。

C 類の自動詞の習得は比較的容易である。

D 類の自動詞について、「もつ」の場合は習得が難しいが、「ひらく」の場合は習得が易しい

E 類における自動詞の習得は易しい。

3. 無対自動詞:

A 類における自動詞の習得は易しい。

B 類については言及されていない。

しかし、封（2007）には問題点が 2 つあると思われる。

(1) テスト内容の不十分さ

封 (2007) では、次のようなテストが用いられている。

门怎么也打不开。

ドアをあけようとしても、なかなか ()。

- a. あくことができない b. あかない c. あけない²⁵ d. あかれない
e. a~d までどれも正しくない

設問では、中国語の文が日本語の文の前に先に提示されている。調査対象者が問題を答えようとするとき、中国語の文に左右されてしまう可能性がある。特に、中国語の可能表現「打不开」が示されてしまうと、母語の影響が強まり、選択肢の中から有標識可能形式が選ばれやすくなるという危険性がある。

上の設問は、有対自・他動詞の両方が成り立つ場合でもある。こうした文について、ヤコブセン (1989:240-241) は (5) を挙げ、次のように説明している。

(5) いくら押しても窓が開かない。²⁶

例 (5) での「開かない」を「開けることができない」に置き換え可能である。

青木 (1997:19) も「玄関の鍵が開かないのですがと訴えると、博士は「おお、もちろんだ。そいつは誰にも開けられない」と妙なことを言った。」という例を挙げ、「開かない」を「開けられない」に置き換えても意味内容は変わらないと述べている²⁷。つまり、有対自・他動詞には、各自の際立った性格の他に、互いに依存し合う関係もある。しかし、上の設問では、「開けられない」と「開けることができない」は適切な表現であるにもかかわらず、選択肢に入れられてはいない。

以上のような問題点がある限り、上の設問では日本語学習者における有対自・他動詞の使用実態をより如実に反映させることはできないのではないだろうか。

(2) 中国における大学三年生である JFL 学習者を調査対象者としたが、その習得過程などについては何も論じられていない。

²⁵ 「あける」が「あく」の可能形だと封 (2007) は解釈している。

²⁶ 例文 (5) はヤコブセン (1989) における例文 (86) である。

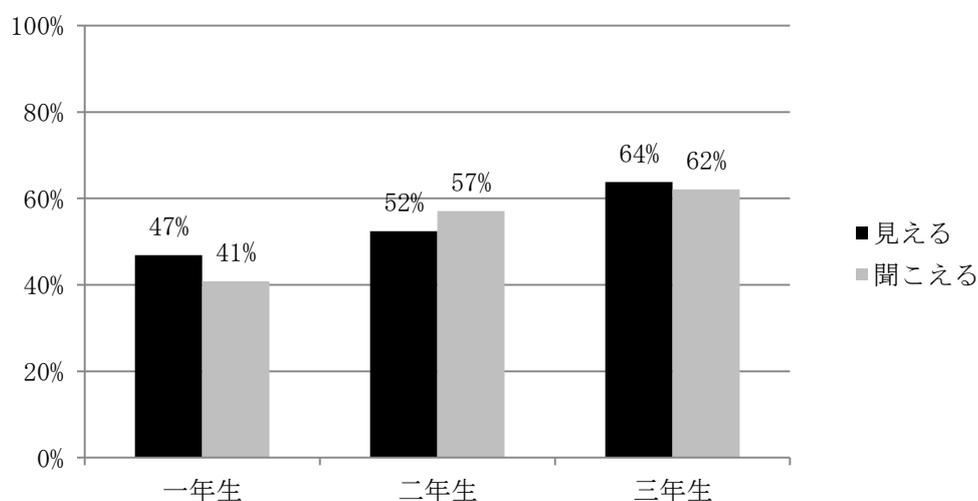
²⁷ この点については、張 (1998:74-75) にも同じ説明がある。

4.3 調査結果と考察

4.3.1 有対自動詞のみが成り立つ表現の場合

図 4-1 に調査参加者一、二、三年生における「見える、聞こえる」の正答率を示す。「見える、聞こえる」は、有対自動詞のみが成り立つ表現の中に使われた「見える、聞こえる」の終止形を指す。その終止形が可能の意味を含意している。

図 4-1 学年毎の「見える、聞こえる」の正答率



よく知られているように、「見える、聞こえる」には「見る、聞く能力がある」という意味がある。当然、「見る、聞く」の可能形である「見られる、聞ける」にもこのような意味はある。しかし、同じく能力を表す動詞であっても、置き換えると不自然な場合もある。例えば、「猫は暗闇でも目が見える」「年のせいか耳が聞こえない」といった表現は文法的であるが、「見られる、聞ける」に置換すると非文になる。このような有対自動詞のみが成り立つ表現では、有対他動詞を使うと誤用文になるので、この誤用文を通じて有対自動詞の理解能力を測ることができる。

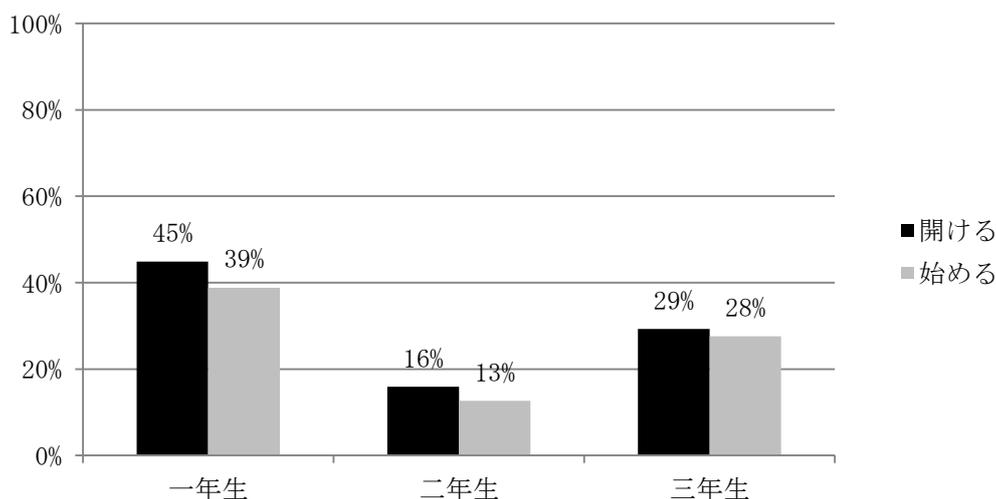
調査の結果、正答率に関しては、「見える、聞こえる」の理解能力は一年生<二年生<三年生のように学年が上がるにつれて高くなること、すなわち少しずつ上達していることが明らかになった。しかし、一年生と三年生の間にはより大きな差（約 20%）が見られたことから、一年生から三年生までの間に二年生の段階を経て習得が進んでいったものと推測される。

一方、誤答率に関しては、「見える」と「聞こえる」におけるそれぞれの誤答率は一年生が約 53%と 59%、二年生が約 48%と 43%、三年生が約 36%と 38%であった。このことから、一年生と二年生にとっては、有対自動詞のみが成り立つ表現の習得はまだ困難ではあるが、三年生にとってはそれほど困難ではないということが窺われる。

4.3.2 有対他動詞のみが成り立つ表現の場合

図 4-2 に調査参加者一、二、三年生における「開ける、始める」の正答率を示す。「開ける、始める」は、有対他動詞のみが成り立つ表現の中に使われた「開ける、始める」の可能形を指す。

図 4-2 学年毎の「開ける、始める」の正答率



調査文「手を怪我したので、ドアが開けられない」「頭が痛いので、勉強が始められない」は、能力可能を表している。つまり、「ドアを開けたい」「勉強を始めたい」意識を持つ動作主が「手を怪我した」「頭が痛い」といった自分自身による原因から、「ドアを開ける」「勉強を始める」動作を実現することができないという表現である。このような有対他動詞のみが成り立つ表現では、有対自動詞「開く、始まる」を使って表現すると誤用文になるので、この誤用文を通じて有対他動詞の理解能力を測ることができる。

調査の結果、「開ける、始める」の正答率に関しては、一年生と三年生が二年生よりも大きいこと、すなわち二年生のとき理解能力は一時的に衰え、三年生になると再び一年生のレベルに戻るといった様子を表していることが明らかとなった。このようなU字型の曲

線を描く言語発達の現象はU字型発達 (U-shaped development) といわれている

(Kellerman1985)。しかし、三年生の「開ける」と「始める」の正答率は、一年生の有対他動詞の正答率の水準に達しておらず、約 16%と 11%の差があることから、学年が上がっても習得は進まないものと推測される。さらに言うと、習得が上達するどころか却って退歩する傾向があるので、定着化 (stabilization) ²⁸にも繋がっていると考えられる。

一方、誤答率に関しては、「開ける」と「始める」におけるそれぞれの誤答率は一年生が約 55%と 61%、二年生が約 84%と 87%、三年生が約 71%と 72%であった。いずれも高い誤用率が示されている。特に、二年生と三年生の誤答率が目立つ。このことから、どの学年の学生においてもこのような表現の習得は極めて困難であることが窺われる。

一年生は有対自動詞の理解がまだ弱いですが、学年が上がるにつれて、二年生あるいは三年生になると、教科書や日本語の先生などを通じて有対自動詞と接触する機会が多くなるとともに、聞いたり読んだりするインプットも多くなる。そのため、二年生と三年生のうち約 85%と 69%の人が自動詞と自動詞可能形を答え、誤用を犯している。このことから、二年生になってはじめて他動詞の代わりに自動詞を使いたいという意識が強く感じられる。

4.3.3 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現の場合

調査計画について、3×2の2要因配置が用いられた。第1の要因は調査参加者の学年で、一年生、二年生と三年生の3水準であった。第2の要因は有対動詞の種類で、有対自動詞と有対他動詞の2水準であった。第1の要因は参加者間変数、第2の要因は参加者内変数である。

有対自・他動詞の両方が成り立つ表現では、有対自・他動詞の両方が正しいとはいえ、いずれか一方のみを使ったとしても間違っているわけではない。ただし、有対自動詞を使うべきところで他動詞を使ってしまったり、あるいは有対他動詞を使うべきところで有対自動詞を使ってしまったりすることによって、語用上不適切な表現を作ってしまう可能性もある。この可能性をひとまず考慮しなければ、有対自・他動詞の使用傾向を測ることができる。

このような表現についての分析対象は調査参加者が答えた正用のみであった。無答と誤用については分析対象から除外した。正用数の計算方法は次のとおりである。有対自・他動詞の両方が成り立つ表現では、4つの調査文のうち、すべて自動詞を答えた場合は自動詞4点、2つの調査文で自動詞を答え、もう1つの調査文で他動詞を答え、最後の調査文で無

²⁸ Long (2003) は化石化よりも定着化と呼んだ方がいいと主張している。

答と誤用の場合は自動詞 2 点、他動詞 1 点、その無答と誤用 0 点のように数える。ただし、有対自・他動詞の両方が正しいと答えた人がいないので、満点が 4 点までである。

図 4-3 に学年ごとの有対自・他動詞の平均正用数及び標準偏差を示す。

図 4-3 各学年における有対自・他動詞の平均正用数及び標準偏差

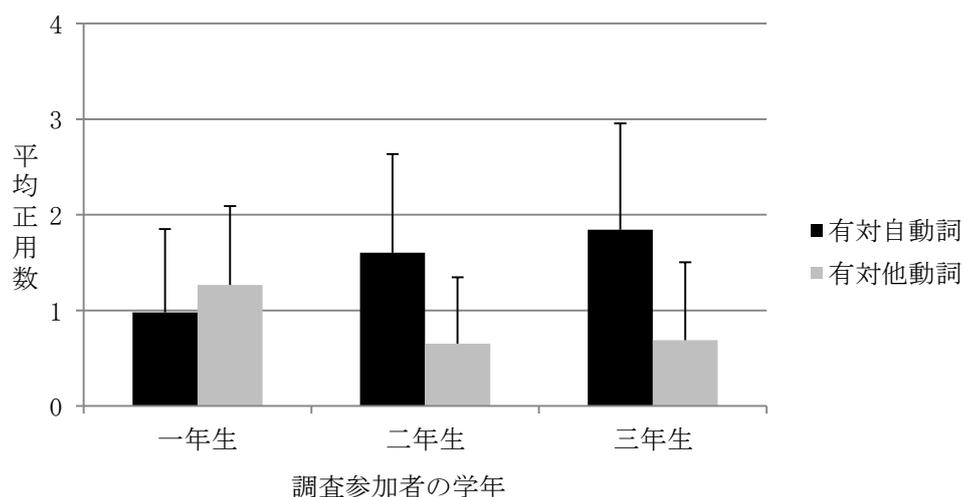


図 4-3 の結果をもとに、3 (調査参加者の学年 (A) : 一年生 (a1) 、二年生 (a2) 、三年生 (a3)) × 2 (有対動詞の種類 (B) : 有対自動詞 (b1) と有対他動詞 (b2)) の 2 要因分散分析を行った。表 4-4²⁹でその結果を示す。

表 4-4 各学年の有対自・他動詞に関する分散分析表

source	SS	df	MS	F	p
A:学年	1.5192661	2	0.7596330	1.632	0.1986
error[S(A)]	77.7143835	167	0.4653556		
B:有対動詞	31.0065301	1	31.0065301	25.861	0.0000 ****
AB	34.0992544	2	17.0496272	14.220	0.0000 ****
error[BS(A)]	200.2302956	167	1.1989838		

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表 4-4 から分かるように、調査参加者の学年の主効果は有意ではなかったが ($F(2,167)$)

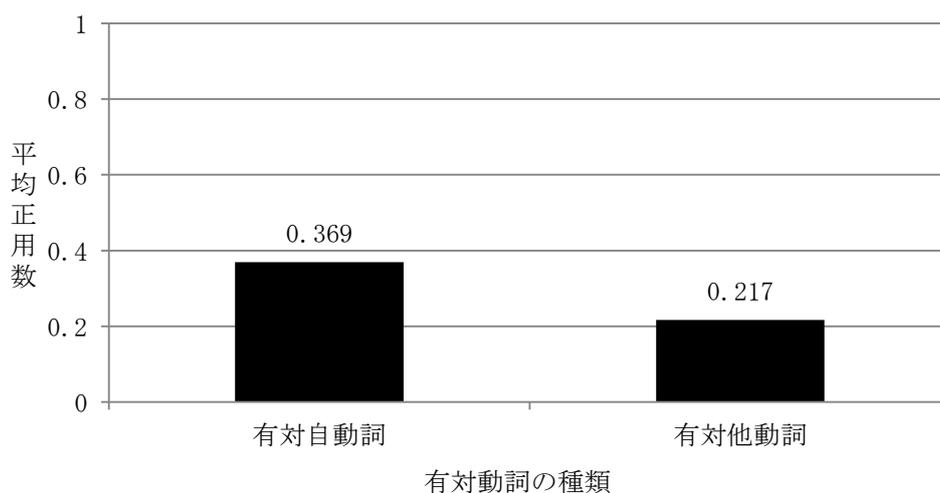
²⁹ 表 4-4 で調査参加者の学年を「学年」、有対動詞の種類を「有対動詞」と略す。

=1.632, *n.s.*)、有対動詞の種類の主効果は有意であった ($F(1,167) = 25.861, p < .001$)。また、調査参加者の学年×有対動詞の種類の変種作用も有意であった ($F(2,167) = 14.220, p < .001$)。以下、調査参加者の学年の主効果と有対動詞の種類の主効果、およびその変種作用を考察していく。

4.3.3.1 有対動詞の種類的主効果

図 4-4 の B の結果から、調査参加者の学年を考慮しないときの有対自・他動詞の総平均正用数 (図 4-9) に関しては、調査参加者の学年にかかわらず、有対自動詞の方が有対他動詞よりも平均正用数が多いこと、すなわち中国語母語話者は、このような有対自・他動詞の両方が成り立つ表現では、有対自動詞の方を多用することが分かった。

図 4-9 調査参加者全員における有対自・他動詞の総平均正用数



一方、誤用率 (表 4-10) に関しては、この 4 つの調査文では選んでしまった誤用はほとんどが自動詞の可能形である。その選択率が総人数の約 39.67% を占めている。それぞれの学年の選択率は一年生が 42%、二年生が 41.75%、三年生が 35.25% である。三年生の誤用率も高いので、このような表現における動詞は習得が難しいことが窺われる。

表 4-10 一、二と三年生における誤用の選択率

調査動詞 \ 学年	一年生		二年生		三年生	
	自動詞可能形	その他	自動詞可能形	その他	自動詞可能形	その他
見える/見る	39%	1%	40%	0%	47%	1%
聞こえる/聞く	33%	1%	31%	0%	22%	0%
開く/開ける	55%	0%	59%	3%	48%	0%
始まる/始める	41%	4%	37%	4%	24%	4%
各学年の選択率	42%	1.5%	41.75%	1.75%	35.25%	1.25%
総人数の選択率	自動詞可能形：39.67% その他：1.5%					

4.3.3.2 調査参加者の学年×有対動詞の種類の変異作用

図 4-4 の AB の結果から分かるように、調査参加者の学年×有対動詞の種類の変異作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った。その結果を表 4-11 に示す。

表 4-11 AB 変異作用における単純主効果

source	SS	df	MS	F	p	
A(b1)	22.3435607	2	11.1717803	13.425	0.0000	****
A(b2)	13.2749598	2	6.6374799	7.976	0.0004	****
error		334	0.8321697			
B(a1)	2.2878013	1	2.2878013	1.908	0.1690	
B(a2)	25.4200146	1	25.4200146	21.201	0.0000	****
B(a3)	37.3979686	1	37.3979686	31.191	0.0000	****
error		167	1.1989838			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

4.3.3.2.1 単純主効果の A (b1) と A (b2)

表 4-11 の A (b1) と A (b2) の結果は、調査対象者の学年×有対自動詞の場合 ($F(2,334) = 13.425, p < .001$) と、調査対象者の学年×有対他動詞の場合 ($F(2,334) = 7.976, p < .001$) がともに有意であることを示している。そのため、Ryan 法による多重比較を行った。結果は

表 4-12 のとおりである。

表 4-12 多重比較

有対自動詞	一年生	二年生	三年生	有対他動詞	一年生	二年生	三年生
一年生	-----	*	*	一年生	-----		
二年生		-----		二年生	*	-----	
三年生			-----	三年生	*		-----

* $p < .05$

表 4-12 の有対自動詞の結果から、二年生 ($t=3.589, df=334, p<.05$) と三年生 ($t=4.888, df=334, p<.05$) は一年生との間に有意な差が見られた。これは、二、三年生が一年生よりも有対自動詞の平均正用数が多いことを示す。つまり、有対自動詞の使用が学年を追って多くなる様子を表している。二年生と三年生の間に統計的な有意差はなかったが ($t=1.456, df=334, n.s.$)、三年生の方が二年生よりも平均正用数が約 0.242 多いことから、一年生の段階を境界線として学年が上がるにつれて、有対自動詞が著しく使えるようになり、その後二年生から三年生まで上がる間に漸進的に習得されていくものと推測される。

また、表 4-12 の有対他動詞の結果から、一年生は二年生 ($t=3.537, df=334, p<.05$)、三年生 ($t=3.252, df=334, p<.05$) との間で有意な差が見られた。これは、一年生が二年生と三年生よりも有対他動詞の平均正用数が多いことを示す。つまり、有対他動詞の使用が学年を追って少なくなる様子を表している。だが、二年生の平均正用数 (0.651) と三年生の平均正用数 (0.690) の間に、統計的な有意差はなかったことから ($t=0.234, df=334, n.s.$)、一年生の段階を境界線として学年が上がるにつれて、有対他動詞を使わなくなり、二年生の辺りで下げ止まりしているものと推測される。

4.3.3.2.2 単純主効果の B (a1) と B (a2) と B (a3)

表 4-11 の B (a1) の結果から、一年生における有対自・他動詞の間に有意な差は見られなかったことから ($F(1,167) = 1.908, n.s.$)、一年生は有対自・他動詞を区別して用いようとする意識が小さいと考えられる。

一方、表 4-11 の B (a2) と B (a3) の結果から、二年生 ($F(1,167) = 21.201, p<.001$) と三年生 ($F(1,167) = 31.191, p<.001$) においては、有対自動詞の方が有対他動詞よりも平均

正用数が有意に多いことが分かった。これは、二年生と三年生は有対自動詞の方を多用することを示す。つまり、二年生と三年生は有対自・他動詞の区別を意識し始めていると考えられる。

一年生は有対自動詞の理解がまだ弱いですが、学年が上がるにつれて、二年生あるいは三年生になると、教科書や日本語の先生などを通じて有対自動詞と接触する機会が多くなるとともに、聞いたり読んだりするインプットも多くなる。また、二年生になると、日本人教師による授業や日本のドラマやアニメを通したヒアリングの授業が始まる。このとき、学習者は日本語母語話者が実際の発話では自動詞によるナル的表現を好んで使っていることに気づき、だんだんと意識的に有対他動詞の使用を放棄し、有対自動詞の使用へと切り替えているのであろう。

4.3.4 調査結果と考察のまとめ

(1) 有対自・他動詞のいずれか一方のみが適切な表現について

有対自動詞のみが成り立つ表現の場合、正用率からは、習得は学年を追って進んでいくと推測される。一方、誤用率からは、一年生と二年生にとってはこのような表現の習得はまだ難しいが、三年生にとってはそれほど難しいではないといったことが窺われる。

また、有対他動詞のみが成り立つ表現の場合、正用率からは、一年生の段階で習得の度合いが最も大きいですが、二年生のとき理解能力は一時的に衰え、三年生になると再び一年生のレベルに戻るといったU字型の曲線を描いていることが分かった。しかし、三年生は一年生のレベルに完全に達しておらず、まだ差がある。このことから、このような表現は学年が上がっても習得が進まないものと推測される。さらに言うと、習得が上達するどころか却って退歩する傾向がある。一方、誤用率からは、このような表現はどの学年の学習者にとっても習得が難しいことが窺われる。特に、自動詞と自動詞可能形を答え、誤用を犯している二年生と三年生の誤用率が非常に目立つ。このことから、二年生になってはじめて他動詞の代わりに自動詞を使いたいという意識が強く感じられる。

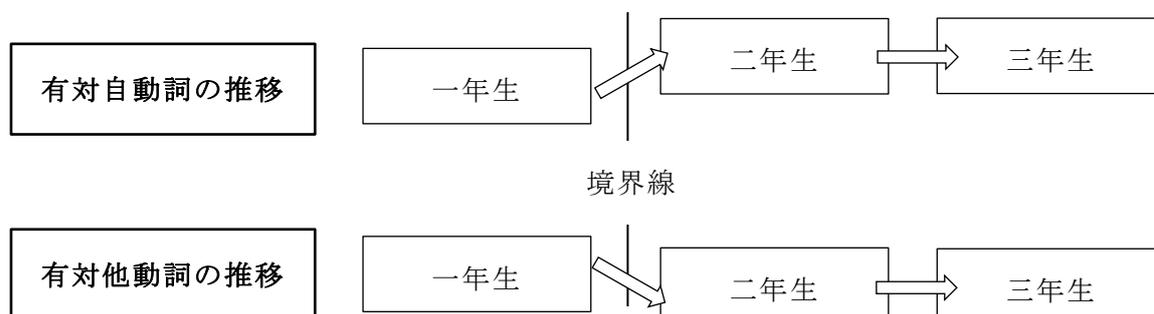
(2) 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現について

まず、調査参加者の学年を考慮せずに考察すると、有対他動詞と比べ有対自動詞の方が多用されることが分かった。しかし、誤用を犯している人が総人数の約 41.17%（自動詞可能形：39.67%、その他：1.5%）を占めている。誤用率がかなり高いので、有対自・他動

詞の両方が成り立つ表現はまだ習得されていないと考えられる。

また、学年ごとの有対自・他動詞の使用傾向から、一年生は有対自・他動詞の区別をあまり意識していないが、二年生と三年生は有対自・他動詞の区別を意識していることが推察できよう。一年生は有対自動詞への理解がまだ弱いですが、学年が上がるにつれて二年生あるいは三年生になると、有対自動詞と接触する機会が多くなり、聞いたり読んだりするインプットも多くなる。その結果として、日本語母語話者が実際の発話では自動詞によるナル的表現を好んで使っていることに気づき、だんだんと意識的に有対他動詞の使用を放棄し、有対自動詞の使用へと切り替えていく。この点は、上の(1)の結果、すなわち有対他動詞のみが成り立つ表現では二年生になってはじめて他動詞の代わりに自動詞を使いたいという意識が強いことを的確に裏付けているであろう。

さらに、一年生、二年生と三年生における有対自・他動詞を関連付けて見ると、有対自動詞の使用は学年を追って多くなるが、有対他動詞の使用は学年を追って少なくなるのが分かった。その具体的な推移は、以下のような過程をたどると考えられる。



有対自動詞の場合は、一年生の段階を境界線として、学年が上がるにつれ使用が顕著に向上し、その後二年生から三年生にかけて上達する間に少しずつ漸進的に習得されていく。一方、有対他動詞の場合は、一年生の段階を境界線として、学年が上がるにつれ使用が急速に衰え、二年生の辺りで下げ止まりしていると考えられる。

まとめの(1)と(2)を踏まえると、有対自・他動詞の習得状況に関しては、有対自・他動詞の使い分けが難しいということが分かる。そして、注目すべきことは有対自・他動詞の両方が成り立つ表現では、有対自・他動詞両方とも自然だと思っている学習者はいないということである。このことについて、中石(2005:64)では、日本語学習者は自他動詞対のいずれか一方のみを使用するという使用の不均衡性があると述べ、関(2012:99)では、有対

自・他動詞の両方が成り立つ表現を日本人のように理解している日本語学習者は少ないと述べている。本調査の結果はそれらの説明を支持している。

守屋（1994）、小林（1996）、姚（2004）、封（2007）、李（2008）、伊藤（2012）では、「自動詞の習得と使用が困難である」という共通の結論が得られている。さらに、有対自・他動詞の派生的用法を中心とした小林（1996）と封（2007）でも、「行為の結果の状態を表す自動詞（小林 1996）、可能の意味を含む自動詞（封 2007）の習得と使用が難しい」という指摘がなされている。しかし、日本語学習者向けの調査には、初級・中級・上級レベルから1つのレベルの学習者のみを対象としたものが多い。その中から得られた見解には、「木を見て森を見ず」的な面がある。初級から上級までの第二言語習得過程を連続的に全体的に見ることができないからである。よって本章では、中国語母語話者一、二、三年生は有対自・他動詞による有・無標識可能表現をどのように習得していくのかを横断的に考察した。このような横断的研究を行うことによって、先行研究における不備な点を補うことができる。具体的には以下の3点である。

- [1] 有対自動詞のみが成り立つ表現の習得は一、二年生にとってはやや困難であるが、三年生からは容易になる。
- [2] 難しいと言われてきた自動詞と同様に、他動詞の習得にも困難さがある。それは有対他動詞のみが成り立つ表現における「開ける、始める」である。その習得はどの学年の学習者にとっても困難である。
- [3] 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における「見える、聞こえる、開く、始まる」と「見る、聞く、開ける、始める」の習得は極めて困難である。このような表現では自動詞の方が多用されているが、その多用は二、三年生からである。

4.4 本章のまとめ

中国語を母語とする日本語学習者は他動詞によるスル的表現を好んで用いるとされているが、その原因としては次の2つが考えられている。1つ目は、日本語では両用動詞が非常に少ないが、中国語はその逆である（寺村 1982）ことである。2つ目は、母語である中国語と比べたところ、日本語の可能を表す自動詞の標識構造の違いは大きいですが、他動詞の標識構造はそうではなく類似していることである。そのため、日本語教師や研究者は「自

動詞の習得と使用が困難であるのに対して、他動詞の習得と使用が容易である」という認識と見解を持っている場合が多い。しかし、本研究を通じてその認識と見解は、ただ習得状況と使用状況の一端を表すに過ぎないことが分かった。

また、中国語を母語とする日本語学習者は、学習時間が長くなるにしたがって、だんだんと意識的に他動詞の使用を放棄し、自動詞の使用へと切り替えるという調査結果から、実は母語からの「負の転移」³⁰に左右されず自分なりの中間言語を構築していくという第二言語習得のプロセスが考えられる。このプロセスの中で、大きな転換期は出現する。それは一年生の終わった後の二年生の時期である。

³⁰ 中国語母語話者が他動詞によるスル的表現を好んで用いるのは母語干渉が強いといった原因である(小林 1996、姚 2004)。

第五章

形態上の対応は有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の習得に影響をもたらすか

—異なる対応型の使用状況を比較して—

5.1はじめに

有・無標識可能表現における有対自・他動詞の習得を検討する際、形態的特徴に関する問題は無視することができない。特に、有対自・他動詞における形態上の対応の違いが、日本語の習得にどのような影響を与えるのかを深く考察することは意義がある。この問題について、第四章では論じられていないので、本章はそれを補うものである。

本章の目的は、上述した不備な点を補充することと、さらにはまだ明らかにされていない点、すなわち形態上の対応は、有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の習得に影響するかどうか、影響すればその使用状況がどのようになるかといった点を明らかにすることにある。

5.2 調査計画

2×2の2要因配置が用いられた。第1の要因は対応型の種類で、「u(≠ru)-eru」(以下、対応型Ⅰ：開く/開ける、付く/付ける、届く/届ける)と「aru-eru」(以下、対応型Ⅱ：見つかる/見つける、始まる/始める、上がる/上げる)の2水準であった。第2の要因は有対動詞の種類で、自動詞と他動詞の2水準であった。この2つの要因は、ともに対象者内変数である。

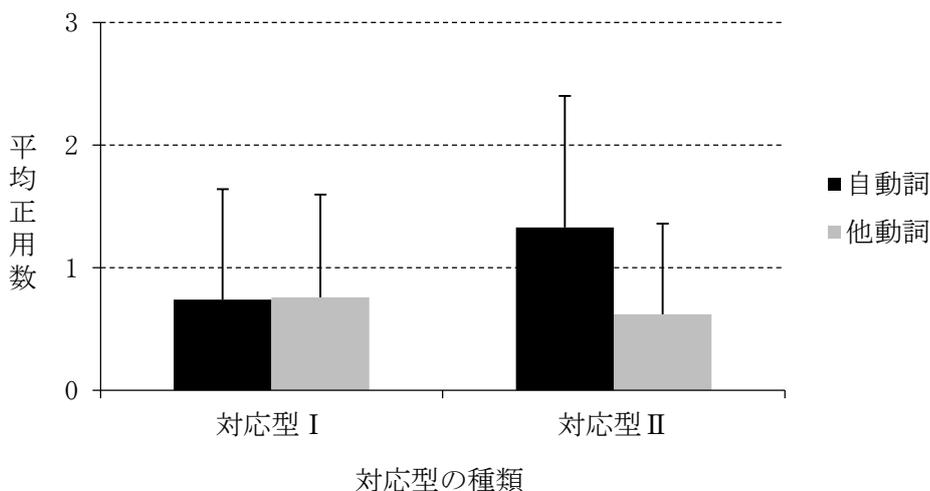
5.3 調査結果

本調査についての分析対象は対象者が答えた正用のみである。無答と誤用については分析対象から除外した。正用数の計算方法は次のとおりである³¹。対応型Ⅰにおける自・他動詞のいずれもが適切な表現では、3つの調査文のうち、すべて自動詞を答えた場合は自動詞3点、2つの調査文で自動詞を答え、1つの調査文で他動詞を答えた場合は自動詞2点、他動詞1点、1つの調査文で自動詞を答え、もう1つの調査文で他動詞を答え、最後の調査文で誤用の場合は自動詞1点、他動詞1点、その誤用0点のように数えた。対応型Ⅱの場合も対応型Ⅰと同様である。

図5-1に、2つの対応型における自・他動詞の平均正用数と標準偏差を示す。

³¹ 有対自・他動詞の両方が正しいと答えた人はいなかったため、正用数の満点は3点どまりとなった。

図 5-1 対応型 I と II における自・他動詞の平均正用数及び標準偏差



そして、図 5-1 の結果をもとに、2 (対応型の種類 (A) : 対応型 I (a1) と対応型 II (a2)) × 2 (有対動詞の種類 (B) : 自動詞 (b1) と他動詞 (b2)) の 2 要因分散分析を ANOVA4 で行った。表 5-2 でその結果を示す。

表 5-2 対応型 I と II の自・他動詞に関する分散分析表

source	SS	df	MS	F	p
subject	33.0862069	57	0.5804598		
A:対応型	2.9137931	1	2.9137931	6.755	0.0119 *
error[AS]	24.5862069	57	0.4313370		
B:有対動詞	6.8965517	1	6.8965517	5.90	0.0183 *
error[BS]	66.6034483	57	1.1684815		
AB	7.6034483	1	7.6034483	7.002	0.0105 *
error[ABS]	61.8965517	57	1.0859044		
Total	203.5862069	231			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表 5-2 から分かるように、対応型の種類の主効果 ($F(1, 57) = 6.755, p < .05$) と有対動詞の種類的主効果 ($F(1, 57) = 5.902, p < .05$) がともに有意であった。また、対応型の種類 × 有対動詞の種類の交互作用も有意であったので ($F(1, 57) = 7.002, p < .05$)、単純主効果の

検定を行った。その結果を表 5-3 に示す。

表 5-3 AB 交互作用における単純主効果

source	SS	df	MS	F	p	
A(b1)	9.9655172	1	9.9655172	13.136	0.0004	****
A(b2)	0.5517241	1	0.5517241	0.727	0.3956	
error		114	0.7586207			
B(a1)	0.0086207	1	0.0086207	0.008	0.9305	
B(a2)	14.4913793	1	14.4913793	12.856	0.0005	****
error		114	1.1271930			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表 5-3 の A (b1) と B (a2) の結果から分かるように、対応型の種類×自動詞の場合 ($F(1, 114)=13.136, p<.001$) と有対動詞の種類×対応型Ⅱの場合 ($F(1, 114)=12.856, p<.001$) がともに有意であった。

しかし、A (b2) と B (a1) の結果から、対応型の種類×他動詞の主効果 ($F(1, 114)=0.727, n. s.$) と有対動詞の種類×対応型Ⅰの主効果 ($F(1, 114)=0.008, n. s.$) は有意ではないことが分かった。

5.4 分析

自動詞か他動詞かに関わらず³²、対応型Ⅱの方が対応型Ⅰよりも平均正用数が多い。これは対応型Ⅰと比べ、対応型Ⅱの方が習得されやすいことを表している。2つの対応型の誤用率を見ても、対応型Ⅰが約50%、対応型Ⅱが約35%である。つまり、対応型の違いによって理解度に差が出てくると考えられる。しかし、この点について、さらに考察すると、対応型Ⅰと対応型Ⅱとでは、自動詞間における平均正用数の差がとても大きい、他動詞間におけるそれはほとんどないことが分かった。

³² 自・他動詞の両方が正しいとはいえ、いずれか一方のみを使ったとしても間違っているわけではない。ただし、自動詞を使うべきところで他動詞を使ってしまふ、あるいは他動詞を使うべきところで自動詞を使ってしまふことによって、語用上不適切な表現を作ってしまう可能性がある。本章では、この可能性は考慮しないことにする。

以上から、2つのことが言える。1つ目は、自動詞の場合、その対応型の違いによって、理解度に差が出てくるということである。2つ目は、他動詞の場合、その対応型の違いがあっても、理解度に差は出てこないということである。中国語母語話者は外国語としての日本語の言語構造について、対応型が異なっている自動詞はそれぞれが別の形態標識を持つ動詞として、対応型が異なっている他動詞はその形態標識が互いに近い距離にある動詞として認識していると推測できよう。

対応型Ⅰか対応型Ⅱかに関わらず、自動詞の方が他動詞よりも平均正用数が多いこと、すなわち中国語母語話者は、このような自・他動詞のいずれもが適切な表現の場合、自動詞の方を多用することが明らかになった。しかしながら、単純主効果の検定を行うと、対応型Ⅱでは自動詞が多用されているが、対応型Ⅰでは自動詞と他動詞の間に平均正用数の差はほとんどなく、両方が均等に使われている。これまでの研究では、他動詞と比べ自動詞の使用と習得が難しいとされているが、実は対応型の中に、自動詞の方が他動詞よりも使いやすいものもあれば、そうでもないものもあると考えられる。

5.5 本章のまとめ

本章では、中国語母語話者はどのように有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞を使用しているのかについて、形態的側面からの分析を通じて、以下を明らかにした。

- [1] 対応型Ⅰよりも、対応型Ⅱの方が習得されやすい。
- [2] 同じ対応型における自・他動詞の使用において、自動詞の方が使いやすい対応型Ⅱがあれば、そうでもなく両者を均等に使う対応型Ⅰもある。
- [3] 自動詞の場合、対応型の違いによって、その使用数と理解度に差が現れる。
- [4] 他動詞の場合、対応型が違ったとしても、その使用数と理解度に差は現れない。

[1]と[2]から分かるように、異なる対応型の習得状況とその自・他動詞の使用状況に違いがある。この違いが生じたのは形態上の対応が異なることによってもたらされたからであろう。つまり、形態上の対応がその使用と習得に影響を与えていると考えられる。これは、他動詞だから使用しやすい、自動詞だから使用しにくいといった文法的視点から見る

べきではないことを示唆している。

ある文法項目の習得を困難にしている要因を探るためには、習得を困難にしている要因を言語に求めるだけでなく、言語規則の内在化の際に学習者が取るメカニズムに求める視点もまた必要である（中石 2003：167）。本章では、形態的側面に着目した習得研究を行った。その結果、[3]と[4]から分かるように、日本語を外国語として学んでいる中国語母語話者における言語構造の知識として、対応型が異なっている自動詞はそれぞれが別の形態標識を持つ動詞であり、対応型が異なっている他動詞はその形態標識が互いに近い距離にある動詞であるといった理解がなされている可能性が考えられる。

第六章

有・無標識可能形式が作れる

無対動詞の習得

6.1 はじめに

中国語母語話者にとって「有標識可能自・他動詞と有標識可能形式」は習得しやすく、「無標識可能自動詞と無標識可能形式」は習得しにくいという予測が記述的文法研究（張 1998、張 2001、王 2006、楠本 2009、呂 2010 など）によってなされ、これまでもその予測を検証する習得研究がいくつか行われている（小林 1996、封 2007、楊 2007、王 2012、関 2012、2013a、2014a）。しかし、これらの研究は習得過程には着目しておらず、有対自・他動詞に重点を置いているものがほとんどである。

本章の目的は、以上の観点から、中国黒竜江省の A 大学外国語学院日本語学部で日本語を学ぶ中国語母語話者を対象に行ったアンケート調査をもとに、有・無標識可能形式が作れる無対動詞³³に焦点をあて、その習得の状況と過程を解明する。そして、習得を容易・困難にさせている要因を明らかにすることにある。

6.2 無対動詞に着目した習得研究の必要性

都築（2001）では、自動詞を「可能の意味を含む自動詞」か否かで分類し、3つのグループに分けている。その分類表はすでに表 2-5 に示しているが、便宜のため、ここで改めて表 6-1 に示す。

表 6-1 都築（2001：229、表 2）

	自動詞の下位分類	特徴	例
1	可能形にできる自動詞	意志性がある	会う、上がる (B)、遊ぶ、集まる (B) 等
2	可能の意味を含む自動詞	潜在的意志性がある	合う、上がる (A)、開く、温まる、当たる (A)、集まる等
3	可能形にできず、可能の意味も含まない自動詞	意志性がない	遭う、飽きる、呆れる、明ける、余る、改まる等

³³ 本章では、有標識可能無対動詞と無標識可能無対自動詞を総称して、無対動詞という。

そして都築（2001）は、「可能の意味を含む自動詞」は 2 グループに属する。ただし、表 6-1 の 3 つのグループは、次のように区分することもできると述べ、この場合、無意志動詞の有対自動詞が「可能の意味を含む自動詞」に相当すると論じている。

自動詞の下位分類：

1. 意志動詞
2. 無意志動詞の有対自動詞
3. 無意志動詞の無対自動詞

しかし、「分かる」と「降る」は無意志動詞であり、無対自動詞でもある。次の例文（1）と例文（2）を見てみよう。

(1) 辞書を引かないと、日本語の新聞はほとんど分からない。

(中国語訳：如果不查字典的话、日语报纸几乎看不懂。)

(2) 明日はいい天気なので、たぶん雨は降らない。

(中国語訳：明天是好天气、大概不会下雨。)

例文（1）の「新聞は分からない」は「新聞の内容が読み取れない」ということを意味しており、例文（2）の「雨は降らない」は「雨が降る見込み（可能性）がない」ということを言っている。この場合の可能は「語彙的可能」³⁴を示す。両方とも無標識で可能の意味を表すが、その中国語訳には可能標識（下線部）が見られる。このような特徴を有する無対自動詞は「分かる」と「降る」だけとは限らず、無標識で可能を表すものには有対自動詞のみならず、無対自動詞も含まれている。

また、早津（1995：192）では調査対象とする動詞の総数が多くなるほど、その中に占める自他対応をなす動詞対の割合が低くなるとし、次の表 6-2 を作成している。

³⁴ 張（2012）では、有対自動詞のもつ語彙的なレベルでの可能を「語彙的可能」と呼んで、この「語彙的可能」を特定の構文要素の共起や文脈支持などがなくても可能の意味が成立するものと定義している。本研究はこの定義に従い、無対自動詞が無標識で表す可能にも、「語彙的可能」がある。

表 6-2 動詞の総数と自他対応をなす動詞対の数

	動詞数	自他対応をなす動詞対の数	割合
早津 (1987a)	約 740 語	約 220 対 (440 語)	59.5%
『当用漢字音訓表』	約 1040 語	約 290 対 (580 語)	55.8%
『角川類語新辞典』	約 3540 語	約 590 対 (1180 語)	33.3%
『分類語彙表』	約 4800 語	約 420 対 (840 語)	17.5%

この表 6-2 から、動詞の中に無対自・他動詞はかなり多く、日本語の教育や学習において重要な位置を占めていることが分かる。しかし、これまでの習得研究では、無対自・他動詞は関心の対象外である。有対自・他動詞と無対自・他動詞はその意味的な分類領域をかなり異にしている（早津 1987b、1995）ので、無対自・他動詞に絞る習得研究は必要不可欠である。

6.3 調査計画

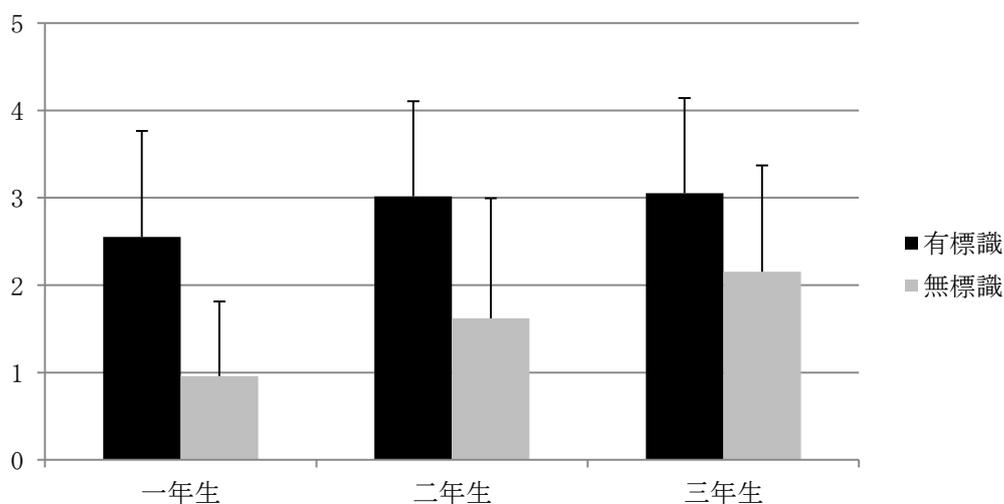
3×2 の 2 要因配置を用いた。第 1 の要因は調査対象者の学年であり、一年生、二年生と三年生の 3 水準であった。第 2 の要因は有・無標識可能動詞であり、有標識（眠る、走る、書く、話す）と無標識（分かる、慣れる、吹く、降る）の 2 水準であった。第 1 の要因は対象者間変数、第 2 の要因は対象者内変数である。

6.4 結果と分析

本調査についての分析対象は調査対象者が答えた正用のみである。無答と誤用については分析対象から除外した。調査文 4 文ずつになっている有・無標識可能形式が作れる無対動詞の用法の中で、3 文が正しければ、その用法が習得されていると判断する。

図 6-3 に調査対象者一、二、三年生における有・無標識可能動詞の平均正用数及び標準偏差を示す。

図 6-3 各学年における有・無標識可能動詞の平均正用数及び標準偏差



そして、図 6-3 の結果をもとに、3 (調査対象者の学年 (A) : 一年生 (a1)、二年生 (a2)、三年生 (a3)) × 2 (有・無標識可能動詞 (B) : 有標識 (b1) と無標識 (b2)) の 2 要因分散分析を ANOVA4 で行った。表 6-4³⁵でその結果を示す。

表 6-4 対応型 I と II の自・他動詞に関する分散分析表

source	SS	df	MS	F	p	
A:学年	41.7665863	2	20.8832931	13.251	0.0000	****
error[S(A)]	263.1826570	167	1.5759441			
B:標識	141.0142484	1	141.0142484	121.924	0.0000	****
AB	7.2093379	2	3.6046689	3.117	0.0469	*
error[BS(A)]	193.1477051	167	1.1565731			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表 6-4 から分かるように、調査対象者の学年の主効果 ($F(2, 167) = 13.251, p < .001$) と有・無標識可能動詞の主効果 ($F(1, 167) = 121.924, p < .001$) がともに有意であった。また、調査対象者の学年 × 有・無標識可能動詞の交互作用も有意であったので ($F(2, 167) = 3.117, p < .05$)、単純主効果の検定を行った。その結果を表 6-5 に示す。

³⁵ 表 6-4 で調査対象者の学年を「学年」、有・無標識可能動詞を「標識」と略す。

表 6-5 AB 交互作用における単純主効果

source	SS	df	MS	F	p	
A(b1)	8.7454241	2	4.3727121	3.201	0.0420	*
A(b2)	40.2305000	2	20.1152500	14.723	0.0000	****
error		334	1.3662586			
B(a1)	71.0152204	1	71.0152204	61.401	0.0000	****
B(a2)	54.6812759	1	54.6812759	47.279	0.0000	****
B(a3)	22.5270900	1	22.5270900	19.477	0.0000	****
error		167	1.1565731			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

表 6-5 の B (a1) と B (a2) と B (a3) の結果から、いずれの学年においても有標識の方が無標識よりも平均正用数が多いことも分かった（一年生： $F(1, 167) = 61.401, p < .001$ 、二年生： $F(1, 167) = 47.279, p < .001$ 、三年生： $F(1, 167) = 19.477, p < .001$ ）。

また、表 6-5 の A (b1) と A (b2) の結果は、調査対象者の学年×有標識の場合 ($F(2, 334) = 3.201, p < .05$) と、調査対象者の学年×無標識の場合 ($F(2, 334) = 14.723, p < .001$) がともに有意であることを表している。そのため、Ryan 法による多重比較を行った。結果は表 6-6 のとおりである。

表 6-6 多重比較

有標識 A(b1)	一年生	二年生	三年生	無標識 A(b2)	一年生	二年生	三年生
一年生	-----	+	+	一年生	-----	*	*
二年生		-----		二年生		-----	*
三年生			-----	三年生			-----

+ p<.10, * p<.05

表 6-6 の A(b1) の結果から、二年生 ($t=2.088, df=334, p < .10$) と三年生 ($t=2.208, df=334, p < .10$) は一年生との間に有意傾向³⁶が見られたが、二年生と三年生の

³⁶ A (b1) を多重比較する際に、各学年の間に $p < .05$ の差は見られなかった。しかし、A (b1) が有意 ($p < .05$) なので、 $p < .10$ による多重比較の検定結果を参考にした。

間には見られなかった ($t=0.169$, $df=334$, $n. s.$)。

一方、A(b2)の結果から、三年生と二年生 ($t=2.521$, $df=334$, $p<.05$)、二年生と一年生 ($t=2.964$, $df=334$, $p<.05$)、三年生と一年生 ($t=5.273$, $df=334$, $p<.05$) の間に有意差が見られた。

以上の結果を分析すると、以下の3点が明らかになった。

①それぞれの学年の平均正用数において有標識可能動詞は無標識可能自動詞との間に有意差が見られたことから、一、二と三年生の学生にとって有標識可能動詞は習得されやすく、無標識可能自動詞は習得されにくいということが分かる。

②有標識可能動詞に関しては、二年生と三年生における平均正用数がそれぞれ約 3.016 と 3.052 に達しており、すなわち調査文 4 文のうち 3 文ができていますので、習得されていると考えられる。しかし、二年生と三年生は一年生との間に 10%水準での有意傾向が見られたことから、一年生にとっては有標識可能動詞の習得はそれほど難しくなく、もう少し時間をかけて習得されると推測される。

③無標識可能自動詞に関しては、それぞれの学年における平均正用数の間に有意差が見られ、一年生 < 二年生 < 三年生のように学年を追って上達していく様子を表している。しかし、習得は進んでいるとはいえ、三年生になっても調査文 4 文のうち大体 2 文しかできていないので、習得されていないと判断される。

6.5 考察

今回の調査結果を見ると、有標識可能動詞の習得状況は良いが、無標識可能自動詞の習得状況は決して良いとは言えない。特に、三年生の段階でもその理解がよくできていないことに注意すべきである。以下、この調査結果に基づいて、有・無標識可能動詞の習得に影響する要因として、言語転移 (language transfer)、教科書と過剰般化 (overgeneralization) から考察を行っていく。

6.5.1 言語転移

第二言語習得研究では、多くの要因から学習者の習得状況を考察している。その1つの内的要因として母語の影響がよく取り上げられる。母語の影響を検討する場合、正と負の転移が考えられる。学習者は外国語を学習するときに、母語が影響するので、目標言語の

構造と似ている場合には、正の転移によって習得が容易になる。一方、異なる場合には負の転移によって習得が困難になるという対照分析仮説(Contrastive Analysis Hypothesis)がある(Lado1957)。この仮説を利用して、中国語訳を参考にしながら、母語である中国語が日本語の有・無標識可能動詞の習得に影響する可能性を検討していく。

まず、日本語の有標識可能動詞とその中国語訳である表 6-7 を見てみよう。

表 6-7 日本語の有標識可能動詞とその中国語訳

調査文	中国語訳
外がうるさいので、 眠ろうとしても眠 <u>れ</u> ない。	外面很吵、所以怎么睡也 <u>睡不着</u> 。
赤ちゃんなので、まだ走 <u>れ</u> ない。	他是个刚出生的孩子、所以还不会跑。
中国語を勉強したことがないので、 漢字が書 <u>け</u> ない。	没学过汉语、所以不会写汉字。
私は中国人ではないので、 中国語が話 <u>せ</u> ない。	我不是中国人、所以不会说汉语。

(下線部は可能標識を表す。以下同様)

表 6-7 に示しているように、調査文における「眠れない」に対応する中国語は可能補語「V 不 C」の「睡不着」であるのに対し、「走れない」、「書けない」と「話せない」といった調査動詞は、中国語の可能助動詞「不会跑」「不会写」「不会说」で表現されている。このことから、日本語も中国語も可能標識を使って主体がある動作か状態を実現できるかどうかを表していることが分かる。このような表現形式は、目標言語である日本語の構造と類似しているので、正の転移を起こさせ、習得を促進させるものであると考えられる。

次に、日本語の無標識可能自動詞とその中国語訳である表 6-8 を見てみよう。

表 6-8 日本語の無標識可能自動詞とその中国語訳

調査文	中国語訳
辞書を引かないと、 英語の新聞はほとんど分からない。	不查字典的话、几乎 <u>看不懂</u> 英文报纸。
どんなに長く住んでいても、 ここの生活には慣れない。	不论住多久、都 <u>习惯不了</u> 这里的生活。
明日はいい天気なので、 たぶん強風は吹かない。	明天是个好天气、大概（ <u>不会刮/刮不了</u> ）大风。
日照りが続いているので、 たぶん大雨は降らない。	太阳一直高高地挂着、大概（ <u>不会下/下不了</u> ）大雨。

表 6-8 に示しているように、調査文における「分からない」「慣れない」「吹かない」「降らない」から可能標識は見られないが、それらに対応する中国語では「看不懂」「习惯不了」「不会刮/刮不了」「不会下/下不了」といった可能標識を使って表現している。日本語の調査動詞は可能の意味を、標識を使わず無対自動詞の持つ語彙的な意味で表す。この場合、対照言語学では日本語は可能標識を用いなくても可能の意味を表せると説明され得る。つまり、両言語における構造の差によって、負の転移が起こり、習得を遅延させていると考えられる。

以上のことから、有標識可能動詞は早い段階で習得されるが、無標識可能動詞はなかなか習得されにくいという点については、母語の影響に起因すると考えることができる。

6.5.2 教科書の影響

これまで母語転移から習得に影響を与える可能性を検討してきたが、外的要因の1つとして、学習者が使用した教科書の影響を無視することはできない。以下、調査対象者が使用している教科書、すなわち『総合基礎日本語』（1999）ハルピン工程大学出版社を取り上げ、考察を進めていく。

この『総合基礎日本語』を観察したところ、可能を表す文法記述は初級用である『第一冊』（一年生の前期教科書）に集中しており、『第二冊』（一年生の後期教科書）からは一切説明されていないことが分かる。『第一冊』の第十課の「文法」（1999:186-188）では、可能の表現形式について次のように記述されている。

一、文法

1. 日语中常用的表示可能的表现形式有以下几种：

①使用“できる”组成“动作性名词+できる”及“动词连体形（基本形）+こと+できる”的形式。

ここならゆっくり話ができる。

（在这里的话能慢慢谈。）

あした学校へ来ることができます。

（明天能来学校。）

②用可能助动词“れる”、“られる”分别接各类动词未然形后、组成可能动词。此时、句中的格助词“を”一般用“が”代替。

五段动词未然形+れる一般发生约音变化。

行く→いか→行か+れる→行かれる、可以约音成“行ける”。

読む→よま→読ま+れる→読まれる、可以约音成“読める”。

日曜日なら、私も行かれます（行けます）。

（星期天的话、我也能去。）

日本語を勉強していますね。この本が読めますか（読めますか）。

（正在学习日语呢。这本书能读吗？）

一段动词未然形・カ变动词未然形+られる。

見る→み→み+られる→見られる。

食べる→たべ→たべ+られる→食べられる

来る→こ→こ+られる→来られる

日曜日だけはテレビが見られます。

（只有星期天能看电视。）

学校の食堂でおいしくて安い物が食べられます。

（在学校的食堂能吃到又好吃又便宜的东西。）

明日来られますか。

（明天能来吗？）

サ变动词“する”的可能形式是“できる”。

お金が無いので、買い物できません。

(因为没有钱、所以不能买东西。)

あなたはこの問題ができますか。

(你会(能做)这个问题吗?)

③自動詞“見える、聞こえる、分かる、入る”有时也可以表示可能的意思。

ここなら、富士山が見えます。

(如果这儿的话、能看见富士山。)

私の話が聞こえますか。

(我的话能听到吗?(能听见我说话吗?))

日本語訳：一、文法

1. 日本語で主として使用されている可能の表現形式は以下のとおりである。

①「できる」で「動作的名詞+できる」及び「動詞連体形(基本形)+こと+できる」の形式を作る。

②可能助動詞「れる」「られる」を各種類の動詞の未然形の後につけて、可能動詞を作る。この場合は、文の格助詞「を」の代わりに、「が」を使うのが普通である。

「五段動詞未然形+れる」の場合は普通約音の変化が生じる。

行く→いか→行か+れる→行かれる、「行ける」と約音できる。

読む→よま→読ま+れる→読まれる、「読める」と約音できる。

一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる

サ変動詞「する」の可能形式は「できる」である

③自動詞「見える、聞こえる、分かる、入る」は可能の意味を表すことがある。

(日本語訳は筆者が訳したものである)

ここの『第一冊』の第十課の「文法」では、有・無標識可能形式について一回きりですべて取り上げられている。しかし、問題点として以下の2点が挙げられる。

1. 有標識可能形式の記述は比較的詳しいものの、無標識可能形式の記述は簡略で、自動詞「見える、聞こえる、分かる、入る」は可能の意味を表すことがあるとしか説明されていない。このような教科書の記述では学習者は無標識で可能を表せるという知識をイン

プットしにくい。

2. 有標識可能形式の記述では、無対他動詞の「食べる、読む」、無対自動詞の「行く、来る」といった動詞が導入され、それらを用いた例文も提示されている。そして、同じ第十課の「練習」(1999:203)では、無対他動詞の「話す、書く、作る」、無対自動詞の「歩く」といった動詞も練習項目として出てくる。

一方、無標識可能形式の記述では、「文法解説」のところで「見える、聞こえる、分かる、入る」といった4つの動詞しか挙げられていない。その4つの動詞のうち、有対動詞は3つあるのに対し、無対動詞は1つしかない。例文を提示する際には、「見える、聞こえる」の例文は見られるが、「分かる、入る」の例文は見られない。さらに、無対自動詞である「降る、吹く」などが既習の動詞であるとはいえ、それらを学習・練習する例文もない。以上のことをまとめと、次の表 6-9 になる。

表 6-9 教科書で導入した動詞

	無対自動詞	無対他動詞	例文	合計
有標識可能自・他動詞	行く、来る、歩く	食べる、読む、話す、書く、作る	あり	8
無標識可能自動詞	分かる	該当なし	なし	1

つまり、有標識可能形式の紹介においては、例文のある無対自・他動詞を合わせて8つの動詞が導入されているのに対して、無標識可能形式の紹介においては例文のない無対自動詞の「分かる」しか見出せず、両者の間にばらつきが大きい。このような語彙的な導入における不均衡性がある限り、学習者の理解と運用に問題を発生させやすい。今回の調査で調べた動詞ごとの誤用率である表 6-10 を見てみよう。

表 6-10 各動詞の誤用率

グループ	動詞	一年生	二年生	三年生
有標識	書く	29%	10%	21%
	話す	35%	21%	14%
	眠る	39%	33%	29%
	走る	43%	35%	31%
無標識	分かる	61%	46%	21%
	慣れる	67%	63%	52%
	吹く	84%	63%	55%
	降る	92%	65%	57%

(枠があるのは教科書で導入した動詞とその誤用率である)

この表 6-10 に示している枠のある動詞、すなわち教科書で導入した動詞に注目してほしい。この3つの動詞「書く、話す」と「分かる」の誤用率はそれらに対応するグループの中で未導入の動詞（枠のない動詞）と比べ、学習者のどの段階においても誤用率が比較的低いことが分かる。この結果から、教科書における語彙的な導入の不均衡性は学習者の習得に影響を与える可能性が考えられる。しかし、この点に関しては稿を改めて仮説検証型の研究を行う必要がある。また、外的要因として周囲からのインプットも考えられる。これらの点は、今後の課題としたい。

6.5.3 過剰般化

Selinker (1972) は、母語が異なる学習者から同じような誤用が産出されるということは、第二言語には母語に影響されない共通の言語体系が存在すると考えている。例えば、可能の意味を持つ自動詞の習得に関して、中国語・韓国語母語話者を調査・比較した楊(2007)の研究がある。この研究では、母語を異にする日本語学習者で、可能形式と共起しない自動詞を可能形式にした誤用が共通的に生じたという結果が出ている。この結果から、無標識可能自動詞の使用では母語の影響による言語間誤用が常に起こるわけではなく、母語が異なる学習者にも共通に見られる言語内誤用があるということが分かる。過剰般化とは、後者である言語内誤用の一種であり、ある1つの規則を別の語へも適用できると考え、広く一般化することである (Selinker1972)。

上の 6.5.2 で挙げた教科書の記述のように、「文法」の②では有標識可能形式の接辞方法として、可能助動詞「れる」「られる」が取り上げられている。その文法解説と例文を次に示す。

文法解説：

可能助動詞「れる」「られる」を各種類の動詞の未然形の後ろにつけて、可能動詞を作る。

「五段動詞未然形+れる」の場合は普通約音の変化が生じる。

行く→いか→行か+れる→行かれる、「行ける」と約音できる。

読む→よま→読ま+れる→読まれる、「読める」と約音できる。

一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる。

見る→み→み+られる→見られる。

食べる→たべ→たべ+られる→食べられる

来る→こ→こ+られる→来られる

例文：

日曜日なら、私も行かれます（行けます）。

日本語を勉強していますね。この本が読まれますか（読めますか）。

日曜日だけはテレビが見られます。

学校の食堂でおいしくて安い物が食べられます。

明日来られますか。

ここに、各種類の動詞の未然形に「れる」「られる」を加えて可能動詞を作るという文法解説がある。そこで、「五段動詞未然形+れる」と「一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる」の接辞方法が取り上げられている。しかし、この2つの接辞方法がそれぞれどのような動詞に使われるのか、またどのような動詞に使われないのかについては言及されていない。

また、ここの可能の意味を表す「行かれる」「読まれる」に注目してほしい。この2つの表現は古風な言い方として誤っているわけではなく、現在も辞書的な意味では正しい。しかし、現実には「行ける」「読める」のような表現を使うのが一般的である。

6.4 での調査結果から分かるように、有標識可能動詞は上の2点の文法を既習した学習

者にとって習得が易しいものの、「書けられない、話せられない、眠れられない、走れられない」を選んだ人がまだ見られる。その選択率を示すと、次の表 6-11 になる。

表 6-11 「られる」を過剰般化した誤用の選択率

動詞	一年生		二年生		三年生	
	れる	られる	れる	られる	れる	られる
書く	22%		5%		12%	
話す	29%		8%		9%	
眠る	33%		22%		16%	
走る	25%		14%		21%	

(「れる」は「五段動詞未然形+れる」が約音された形を示す。以下同様)

これらの誤用は、いったん可能形を持つ動詞に「れる」を付加した後に、さらに「られる」を付加しているものである。学習者は「られる」を代表的な可能標識と思い、それを広く一般化しているからであろう。

また、上の 2 点の文法を既習した学習者のうち、「五段動詞未然形+れる」の「降られない」「吹かれない」「分かれられない」、「五段動詞未然形+れる」が約音された「降れない」「吹けない」「分かれれない」と「一段動詞未然形+られる」の「慣れられない」を選んだ人が多く見られた。その選択率を示すと、次の表 6-12 になる。

表 6-12 「れる」「られる」を過剰般化した誤用の選択率

動詞	一年生		二年生		三年生	
	れる	られる	れる	られる	れる	られる
分かる	47%	10%	37%	9%	10%	11%
慣れる	φ	59%	φ	57%	φ	47%
吹く	59%	20%	41%	21%	41%	10%
降る	65%	24%	40%	25%	19%	38%

(「られる」は「五段動詞未然形+れる」と「一段動詞未然形+られる」の形を示す)

これらの誤用はすべて無標識可能自動詞だけで表すべきところを可能助動詞「れる」「られる」の形式にしてしまったものである。誤用の原因として、学習者は無標識可能自動詞が有標識動詞と同様に、それ自体可能の意味を表さないと認識し、有標識可能動詞の可能形式を作る既習文法規則を無標識可能自動詞にも適用させる過剰般化が考えられる。

以上で述べたことから、無標識可能自動詞の習得が有標識可能動詞の習得よりも難しいのは、有標識可能動詞の文法規則の過剰般化による誤用が多いためだと考えることができる。

6.6 本章のまとめ

本章では、中国語母語話者一、二、三年生を対象に有・無標識可能形式が作れる無対動詞の習得状況と習得過程を探るアンケート調査を行った結果、次のことが明らかになった。

- ①一、二と三年生の学生にとって有標識可能動詞は習得されやすく、無標識可能自動詞は習得されにくい。
- ②有標識可能動詞の習得は一年生にとってもそれほど困難ではなく、二年生からは容易になる。
- ③無標識可能自動詞の習得は学年が上がるにつれて進んでいるとはいえ、どの学年の学習者にとってもまだ困難である。

そして、これらの調査結果に基づいて、とりわけ言語転移、教科書と過剰般化が習得にどのような影響を与えているのかを考察してきた。その結果、明らかになったことをまとめると、次の表 6-13 になる。

表 6-13 習得に影響する要因

	有標識可能動詞	無標識可能自動詞
母語と目標言語	構造的に近い	構造的に遠い
教科書の問題点	記述が詳細 動詞の導入数が多い 例文が多い	記述が簡略 動詞の導入数が少ない 例文が少ない
過剰般化による誤用	数が少ない	数が多い
影響	習得を促進させる	習得を遅延させる

この表 6-13 から分かるように、言語転移と教科書と過剰般化が共に習得において促進を生む要因にもなり、また遅延を発生させる要因にもなりうるのである。

第七章

無標識可能自動詞と 無標識可能形式の指導法

7.1 はじめに

中国語母語話者にとって、「有標識可能自・他動詞」と「有標識可能形式」は習得しやすく、「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」は習得しにくいという予想が対照文法研究（張 1998、張 2001、王 2006、楠本 2009、呂 2010 など）によってなされている。

本研究の第四章～第六章において、それらの予想を検証してきた。しかし、第六章の考察結果から明らかのように、「無標識可能自動詞」が「有標識可能自・他動詞」より習得困難な原因は、母語の影響だけに限らず、教科書と過剰般化などの影響にもある。このうち、とりわけ教科書をいくつか調べてみると、「無標識可能自動詞」の方が「有標識可能自・他動詞」より導入数がかなり少ないこと、「有標識可能形式」は1つの学習項目として取り上げられてはいるが、「無標識可能形式」に関する説明はあまりされていないことが分かった。こうした教科書では、「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」の知識はインプットされにくく、習得にも大きな障害を与える危険性がある。

本章の目的は、上述の問題を解決するために、可能という観点から新たに行った自・他動詞の分類に基づき、中国語版の日本語教科書を分析する。そして、その分析結果を通じて、中国語母語話者に役立つ「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」の指導法を提案することにある。

7.2 教科書での取り扱い方

ここでは、次の3種類の中国語版の教科書を分析対象として取り上げる。

- ①『総合基礎日本語』の第一冊～第四冊、ハルピン工程大学出版社 1999 年版
- ②『新版中日交流標準日本語』の初・中級上・下、人民教育出版社 2005 年版
- ③『新日語基礎教程』の1・2とその学習補導用書1・2、外語教学与研究出版社 1998 年版

上記の3種類の教科書（以下、①を『総合』、②を『新版』、③を『新日』と略す）を観察したところ、可能を表す動詞と表現形式に関する文法記述は初級（一年生）用の教科書に集中していることが分かる。その文法記述を以下に示す。

『総合』

『第一冊』の第十課の「文法」(1999:186-188)

一、文法

1. 日语中常用的表示可能的表现形式有以下几种：

①使用“できる”组成“动作性名词+できる”及“动词连体形（基本形）+こと+できる”的形式。

ここならゆっくり話ができる。

(在这里的话能慢慢谈。)

あした学校へ来ることができます。

(明天能来学校。)

②用可能助动词“れる”、“られる”分别接各类动词未然形后，组成可能动词。此时，句中的格助词“を”一般用“が”代替。

五段动词未然形+れる一般发生约音变化。

行く→いか→行か+れる→行かれる，可以约音成“行ける”。

読む→よま→読ま+れる→読まれる，可以约音成“読める”。

日曜日なら、私も行かれます（行けます）。

(星期天的话，我也能去。)

日本語を勉強していますね。この本が読めますか（読めますか）。

(正在学习日语呢。这本书能读吗?)

一段动词未然形・カ变动词未然形+られる。

見る→み→み+られる→見られる。

食べる→たべ→たべ+られる→食べられる

来る→こ→こ+られる→来られる

日曜日だけはテレビが見られます。

(只有星期天能看电视。)

学校の食堂でおいしくて安い物が食べられます。

(在学校的食堂能吃到又好吃又便宜的东西。)

明日来られますか。

(明天能来吗?)

サ变动词“する”的可能形式是“できる”。

お金が無いので、買い物できません。

(因为没有钱，所以不能买东西。)

あなたはこの問題ができますか。

(你会(能做)这个问题吗?)

③自动词“見える、聞こえる、分かる、入る”有时也可以表示可能的意思。

ここなら、富士山が見えます。

(如果这儿的话，能看见富士山。)

私の話が聞こえますか。

(我的话能听到吗?(能听见我说话吗?))



日本語訳³⁷

一、文法

1. 日本語で主として使用されている可能の表現形式は以下のとおりである。

①「できる」で「動作的名詞+できる」及び「動詞連体形(基本形)+こと+できる」の形式を作る。

②可能助動詞「れる」「られる」を各種類の動詞の未然形の後につけて、可能動詞を作る。この場合は、文の格助詞「を」の代わりに、「が」を使うのが普通である。

「五段動詞未然形+れる」の場合は約音の変化が発生する。

行く→いか→行か+れる→行かれる、「行ける」と約音できる。

読む→よま→読ま+れる→読まれる、「読める」と約音できる。

一段動詞未然形・カ変動詞未然形+られる

サ変動詞「する」的可能形式は「できる」である

③自動詞「見える、聞こえる、分かる、入る」は可能の意味を表すことがある。

³⁷ 日本語訳は筆者が訳したものである。以下同様。

『新版』

『初級上』の第二十課の「文法解説」(2005:237)

语法解释

2. 名(人)は動(基本形)ことができます。

“动词基本形+ことができます”表示可能。在回答别人的询问时,肯定的情况下可以单用“できます”,否定的情况下可以单用“できません”。

スミスさんはピアノを弾くことができます。(史密斯先生会弹钢琴。)

森さんは中華料理を作ることができますか。(森先生会做中国菜吗?)

——はい、できます。(是的,会做。)



日本語訳

文法解説

2. 名前(人)は動詞(基本形)ことができます。

「動詞基本形+ことができます」の形で可能の意を表す。人の質問に答えるとき、肯定の場合は「できます」を使う。否定の場合は「できません」を使えばすむ。

『初級上』の第二十課の「表現及び語句の説明」(2005:239)

表达及词法讲解

1. 写真を撮ることができます。(可能和允许)

“动词基本形+ことができます”基本功能表示可能,但有时根据上下文关系也表示允许。基本课文B中的“ここで写真を撮ってもいいですか(可以在这人照相吗?)”是一个希望得到允许的疑问句,回答是“いいえ、ここでは撮ることができません(不行,不能在这儿照相)”表示不允许。允许的内容,从国家的规章制度到人住公司宿舍的条件等,有许多种类。

日本では何歳から結婚することができますか。

——女の方は16歳から、男の方は18歳からできます。

(在日本,多大年龄可以结婚?——女的16岁,男的18岁。)

寮の洗濯機は何時まで使うことができますか。

——8時までです。それからは使うことができません。

(宿舍的洗衣机可以用到几点? ——用到8点, 那以后就不能用了。)



日本語訳

表現及び語句の説明

1. 写真を撮ることができます (可能と許可)

「動詞基本形+ことができます」基本的な機能は可能の意味を表す。でも、文の前後関係により、許可の意味を表すこともある。本文Bの「ここで写真を撮ってもいいですか」は許可をもらいたい疑問文である。回答の「いいえ、ここでは撮ることができません」は不許可のことを表す。許可の内容は、国家の規則と制度から人が社宅に入る条件までいろいろある。

『初級下』の第三十八課の「文法解説」(2005:153)

語法解説

1. 可能形式

可能形式は表示能够进行某动作的形式, 与第20课学过的“～ことができます”所表示的意义相同。其构成方式如下:

一类动词: 把基本形的最后一个音变成相应的“え”段上的音, 再加“る”。

二类动词: 把基本形的“る”变成“られる”。

三类动词: 把“乗る”变成“乗られる”, 把“する”变成“できる”。

注意: 使用“～ことができます”的动词前面的助词不发生变化, 但使用可能形式时, 动词前面的助词“を”常常变成“が”。

李さんは日本語を話すことができます。(小李会说日语。)

李さんは日本語が話せる。(小李会说日语。)



日本語訳

文法解説

1. 可能形式

可能形式は「ある行為をできること」を表す形式である。第二十課で学習した「～ことができます」の表わす意味と同じである。その形式は以下の通りである。

一類動詞：基本形の最後の音をその音と対応する「え」段の音に変えて、その後ろに「る」を付ける。

二類動詞：基本形の「る」を「られる」に変える。

三類動詞：「来る」を「来られる」に、「する」を「できる」に変える。

注意：「～ことができます」を使うとき、動詞の前に置く格助詞が変わらないが、可能形を使うとき、動詞の前に置く格助詞「を」をよく「が」に変える。

『初級下』の第三十八課の「表現及び語句の説明」(2005:155)

表达及词法讲解

3. “見えます” 和 “見られます”

“見えます”表示由于眼力或者空间距离等客观因素“可以看到”、“見られます”则表示由于人为的、人工的条件“可以看到”。“聞けます”“聞こえます”之间的区别和“見えます”“見られます”之间的区别相同。

外は暗くて、何も見えません。(外头黑，什么也看不见。)

上野動物園ではパンダが見られます。(在上野动物园可以看到熊猫。)



日本語訳

表現及び語句の説明

3. 「見えます」と「見られる」

「見えます」は視力か空間の距離などの客観的な要素で「見ることができる」を表す。「見られる」は人間的・人工的な条件で「見ることができる」を表す。「聞けます」と「聞こえます」の違いは「見えます」と「見られる」の違いと同じである。

『新日』

『新日語基礎教程 1 學習輔導用書』の第 18 課 (1999:208)

3. 「できます」的意思

「できます」有下面两层意思。

- 1) 能力 リーさんは漢字を読むことができます。
 李先生会读汉字。
- 2) 可能 受付でタクシーを呼ぶことができます。
 在服务台可以叫出租汽车。



日本語訳

3. 「できます」の意味

「できます」には次のような 2 つの意味がある。

- 1) 能力と 2) 可能性

『新日語基礎教程 2 學習輔導用書』の第 27 課 (1999:149-150)

1. 可能的表达方式

1-1 表示可能的意思有以下的说法。

- 1) 名词+ができる
(1) わたしは運転ができます。 我会开车。
- 2) 辞书形+ことができる
(2) わたしは泳ぐことができます。 我会游泳。
- 3) 可能动词 (第 27 课)
(3) わたしは泳げます。 我会游泳。

例 (2) 和例 (3) 表示完全相同的内容。例 (2) 可以说是多少有点儿郑重其事的表达方式。

1-2 可能动词的构成方法

【注 1】可能动词作为第 II 组的动词变成辞书形、ない形、て形等。

【注 2】“分かる”自身表示可能的意思，因此没有“わかる”那样的表达方式。

1-3 可能动词的句子

可能动词不是表示动作，而是表示状态。他动词的宾语用助词“を”来表示，而在可能动词的句子中，对象一般用“が”来表示。

わたしは日本語を話します。我说日语。

(4) わたしは日本語が話せます。我会说日语。

“を”以外的助词不变，请注意。

(5) 一人で病院へ行けますか。一个人能去医院吗？

(6) 田中さんに会えませんでした。没有遇到田中先生。

1-4 可能动词的意思

和“辞书形＋ことができます”一样，可能动词也有两个意思：1) 人所具有的行为能力；2) 某种状况中行为的可能性。

1) 能力

(7) ナロンさんは漢字が読めます。纳隆先生会念汉字。

2) 可能性

(8) あの銀行でドルが換えられます。那个银行可以兑换美元。



日本語訳

1. 可能の表現形式

1-1 可能の表現形式は次の通りである。

- 1) 名詞＋ができる
- 2) 辞書形＋ことができる
- 3) 可能動詞

例 2) と例 3) は全く同じ内容を表すが、例 (2) の方がより丁寧な言い方である。

1-2 可能動詞の構成方法

注 1：可能動詞は第二組の動詞として、辞書形、ない形、て形に変わるなど。

注 2：「分かる」自体には可能の意味があるので、「わかれる」のような表現形式はない。

1-3 可能動詞の表現

可能動詞は動作を表すものではなく、状態を表すものである。他動詞の目的語は助詞「を」で示すことに対し、可能動詞の表現では、対象は「が」で示すのが普通である。「を」以外の助詞が変わらないので、要注意。

1-4 可能動詞の意味

「辞書形＋ことができます」と一緒に、可能動詞にも 2 つの意味がある。1) 人が持っている行為の能力、2) ある状況における行為の可能性。

『新日語基礎教程 2 学習補導用書』の第 27 課 (1999:152-153)

6. “見られます” 和 “見えます”、“聞けます” 和 “聞こえます”

他動詞“見ます”、“聞きます”的可能動詞是“見られます”、“聞けます”。它們和“見ることができます”、“聞くことができます”意思相同，表示主体的看的意志、听的意志得到了實現。

与此不同，“見えます”、“聞こえます”是自動詞，和本人的意志無關，表示某種對象物被捕捉進視野、或聲音傳到了耳朵。使用“見えます”、“聞こえます”的句子中，對象物成為主語，用助詞“が”來表示。

この映画は新宿で見られます。这部电影在新宿能看到。

新幹線から富士山が見えました。从新干线看见了富士山。

電話で天気予報が聞けます。能用电话询问天气预报。

ラジオの音が聞けます。能听见收音机的声音。



日本語訳

6. 「見られます」と「見えます」、「聞けます」と「聞こえます」

他動詞「見ます」、「聞きます」の可能動詞は「見られます」、「聞けます」である。それらは「見ることができます」、「聞くことができます」と同じ意味で、主体の「見る」の意志、「聞く」の意志が実現できることを表す。

それに対して、「見えます」、「聞こえます」は自動詞で、本人の意志と関係なく、ある対象物が視野に捉えられたり、ある音が耳に達したりすることを表す。

7.3 教科書の問題点

以上の初級用の教科書における文法記述を見ると、問題点として以下の4点が明らかになった。

(1) 可能の表現形式の導入順序が異なる。各導入順序を示すと、次の表 7-1 の通りである。

表 7-1 各教科書における可能の表現形式の導入順序

教科書	導入順序	
『総合』	初級上（第一冊） 「ことができる」「可能形」「無標識可能自動詞」	
『新版』	初級上（冊） 「ことができる」	初級下（冊） 「可能形」
『新日』	初級上（1と補導1） 「ことができる」	初級下（2と補導2） 「可能形」「無標識可能自動詞」

表 7-1 に示しているように、『総合』は、初級上の段階で「ことができる」、「可能形」と「無標識可能自動詞」が一度きりですべて導入されている。『新版』は、初級上の段階で「ことができる」が、初級下の段階で「可能形」が導入されるという順序であり、「無標識可能自動詞」については触れていない。『新日』は、初級上の段階で「ことができる」が導入され、初級下の段階で「可能形」と「無標識可能自動詞」が導入されるという順序である。

(2) 動詞導入が不均衡である。その結果を示すと、次の表 7-2 になる。

表 7-2 動詞の異なり導入数

タイプ 教科書	有標識可能自・他動詞				無標識可能自動詞			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
『総合』	5	3(1)	1	1	0	1	1	2
『新版』	12(8)	7(1)	4(3)	2	0	0	0	2
『新日』	15(6)	2(3)	5(3)	0	0	1	0	2
合計	57 + (25) = 82				9			

(括弧内は「ことができる」を紹介する際の動詞導入数を示す)

この表 7-2 から、有標識可能自・他動詞のグループにおいては、各タイプの動詞を合わせて 82 個の動詞が導入されているのに対し、無標識可能自動詞のグループにおいては、動詞が 9 個しか導入されておらず、両者の間にばらつきが大きいということが分かる。そして、3 種類の教科書における共通点として以下の 3 点が挙げられる。

- ①有標識可能自・他動詞であるタイプ 1～4 の中で、タイプ 4 の動詞導入数の方が比較的少ない。
- ②タイプ 5 の動詞が共に欠損している。
- ③タイプ 8 の動詞は共に例文を提示しながら導入されているが、タイプ 6 と 7 の動詞はそうではなく、『総合』『新日』では例文が提示されていない。

以上から、次の 2 つのことが言える。1 つ目は、無標識可能自動詞の方が有標識可能自・他動詞より重視度が低いことである。2 つ目は、有標識可能自・他動詞のグループではタイプ 4 が重視されておらず、無標識可能自動詞のグループではタイプ 5～7 が重視されていないことである。

(3)「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」に関する文法解説が不完全である。それぞれの教科書における文法解説を示すと、次の表 7-3 になる。

表 7-3 教科書における文法解説

教科書	文法解説	日本語訳
『総合』	自動詞“見える、聞こえる、分かる、入る”有时也可以表示可能的意思	自動詞「見える、聞こえる、分かる、入る」は可能の意味を表すことがある
『新版』	なし	なし
『新日』	“分かる”自身表示可能的意思，因此没有“わかる”那样的表达方式	「分かる」には可能の意味が入っているので、「わかる」という形を持たない

(日本語訳は筆者が訳したものである)

表 7-3 から分かるように、「無標識可能自動詞」について『新版』では解説がないが、『総合』と『新日』ではある。解説があるとはいえ、簡単な限られた動詞に限定されている。無標識で可能を表す方法や例文、すなわち「無標識可能形式」に関する解説はどの教科書においても見当たらない。

(4) 3 種類の教科書では、「有標識可能形式」の記述は詳しいが、まだ不十分なところがある。「有標識可能自・他動詞」で可能を表そうとすれば、どんな場合に「有標識可能形式」の接辞は適用されないのかということについても言及する必要がある。

7.4 指導法の提案

教科書の分析結果から、「無標識可能自動詞」を紹介する教科書と紹介していない教科書が見られた。紹介のある教科書はいずれも初級用のものであるが、「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」は初級学習者にとってまだ理解しにくい概念であり、初級の段階で教えるには問題がある。この点は新たな導入順序が必要なことを示唆している。

この問題点(1)を解決するために、筆者は導入順序として、初級(一年生)の段階で「有標識可能形式」を、中級(二年生)の段階で「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」を導入するといった順序を提案する。この導入順序は、初級の段階で「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」について一切触れてはいけないということではない。学年が上がるにつれて、理解が相対的に簡単なタイプから理解が困難なタイプへと導入していくという順序でも良い。ただし、少なくとも中級の段階では「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」を学習する項目をより詳しく設けることが望ましい。

問題点（２）を解決するために、タイプ 5～7 の動詞導入が不十分であるという共通の問題点にも注意する必要があり、各タイプの動詞をバランスよく導入することが問題解決の大切なポイントになる。特に、タイプ 7 を教える際の文法解説は「無生物主体の結果状態を述べる場合のタイプ 4 の動詞を含む」と明示するとともに、表 7-4 のような例文を挙げる必要がある。

表 7-4 タイプ 7 がタイプ 4 を含む場合

	例文	下線部の中国語訳
タイプ 7	首が痛いので、頭が <u>上がらない</u>	抬不起来
	本が大きくて、カバンに <u>入らない</u>	放不进去

「無標識可能自動詞」を説明している教科書でも、必ずしも詳しく説明しているわけではなく、ほとんどは簡単に触れるだけで済ませている。このような教科書で学ぶ学習者は「無標識可能自動詞」だけでなく、「無標識可能形式」の知識をもインプットしにくく、定着化あるいは化石化が起こる危険性がある。

この問題点（３）を解決するために、「無標識可能形式」を導入する場合には、自動詞が「可能形」と「ことができる」を使わなくても、可能の意味を表せることを認識させることが重要である。このときの文法解説としては、「日本語では有標識可能形式にできないが、中国語では可能表現にできるという自動詞の使い方がある」ことを明示するとともに、第二章の 2.4.2 における表 2-9 と表 2-10 の例文を提示する必要がある。

教科書の分析結果から分かるように、「有標識可能形式」は詳しく説明されているが、この現状をなおざりにしてはいけない。なぜならば、タイプ 4 の動詞導入と「有標識可能形式」の記述がまだ不十分であるという共通の問題点を 3 種類の教科書が抱えているからである。このような語彙的不均衡性と記述的不足さがある限り、学習者の使用と運用に問題を発生させやすい。

この 2 つの問題点（２）と（４）を解決するために、「有標識可能自・他動詞」と「有標識可能形式」を指導する場合には、バランスが崩れないように各タイプの動詞を導入する必要があり、そして意志動詞は可能形を持つが、無意志動詞は持たないということを学習者に理解させる必要もあると思われる。特に、タイプ 4 を教える際の文法解説は「有生物主体の行為、動作、あるいは動きのある無生物主体の性能、性質を述べる場合に可能形

と共起するが、その主体が無生物で、状態性が強調される場合には可能形と共起しないと明示するとともに、2.4.1で挙げた表2-8のような例文と説明を提示する必要がある。

以上のような文法解説や例文を取り入れることで、中国語を母語とする日本語学習者は「無標識可能自動詞」と「無標識可能形式」の習得が進むとともに、理解も一層深まると考えられる。勿論、すべてを一回限りで紹介するのではなく、学年が上がるにつれて復習項目を加えながら、指導していくことがより有効的であることは言うまでもない。

第八章

結論と今後の課題

8.1 結論

この章では、有・無標識可能動詞を対象とした本研究が明らかにした結果から、研究史と日本語教育における意義を論述し、全体の結論とする。

8.1.1 本研究の研究史における意義

本研究の研究史的意義としては、次の3つが大きな特色として挙げられる。

第一に、可能における自・他動詞の分類に関する研究はまだ少数である。そのうち、他動詞を対象としていなかったり、対があるかないかについて注目されていなかったりしたものが多かった。それに対し、本研究では日本語学での従来の分類を踏まえながら、日中両言語が表された可能形式における類似点と相違点といった観点を入れて、自・他動詞が可能形と共起するかどうか、無標識可能形式になるかどうか、対応する動詞があるかどうか、自動詞か他動詞かといった基準を用いて、自・他動詞の新たな分類を行った。この新たな分類により、学習者の習得しにくい項目を探ることができ、習得の問題の核心に迫ることもできた。

第二に、第二言語としての有対自・他動詞の習得研究において、初めて中国語母語話者一、二、三年生の習得過程を連続的に全体的に見たものである。これまで日本語学習者向けの調査は、初級・中級・上級レベルから1つのレベルの学習者のみを対象としたものであり、初級から上級までの習得過程は明らかにされないままであった。それらの研究は、有対自動詞のみが成り立つ表現と有対他動詞のみが成り立つ表現における動詞にまで拡大されたものがなかった。有対他動詞のみが成り立つ表現における動詞は習得困難であるにもかかわらず、それに関する習得研究にまで進んだものはなかった。そして、有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における動詞の習得研究は、ほとんどが文法的な側面から見たものであり、形態的な側面から検討するものは少なかった。本研究は、これらの限界を克服し、有対自・他動詞の習得研究の全体像に一步近づいたと言える。

第三に、無対自・他動詞は有対自・他動詞より数が多く、日本語において重要な位置を占めているので、それに絞る習得研究は必要不可欠である。しかし、これまでの習得研究は、有対自・他動詞に重点しか置いておらず、無対自・他動詞に対する関心は対象外である。本研究は、初めて中国語母語話者一、二、三年生を対象にしたアンケート調査を通じて、習得過程を連続的に全体的に見ることができた。これは、無対自・他動詞の習得研究

史において大きな進歩であると考えられる。

8.1.2 本研究の日本語教育における意義

本研究では、習得の過程と状況、形態・母語・過剰般化の影響、教科書の問題点とその解決法などを論じた。これらの研究成果は日本語教育において応用できるものであり、中国語母語話者が日本語の自・他動詞を習得する上で役立つものでもあると確信する。

第一に、有・無標識可能表現における有対自・他動詞に関して、有対他動詞のみが成り立つ表現と有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における動詞の習得の難しさが確認された。このうち、有対自・他動詞の両方が成り立つ表現における自・他動詞の使用に関しては、とりわけ文法的小および形態的な分析を通じて、次の2点が明らかになった。

- ▶ 学年があがるにつれて、他動詞から自動詞へとシフトするという大きな転換期は、一年生の終わった後の二年生の時期である。
- ▶ 学習者は形態上の対応からの影響を受けている。

第二に、中国語母語話者は有・無標識可能動詞を習得する際に、母語と教科書と過剰般化の影響を受ける可能性が確認された。無標識可能自動詞は有標識可能自・他動詞より習得困難であるにもかかわらず、日本語教育ではあまり重視されていない。日本語の可能形式を教える際に、本研究の自・他動詞の新たな分類（表 2-6）とその説明を教科書に導入したり、学習者に提示したりすることで、習得を促進することができるのではないだろうか。

第三に、日本語教育への提言に関して、三種類の中国語版日本語教科書への分析によって、「可能の表現形式の導入順序が異なる」、「動詞導入が不均衡である」、「無標可能自動詞と無標識可能形式に関する文法解説が不完全である」、「有標識可能形式の記述は詳しいが、まだ不十分なところがある」といった4つの問題点が解明できた。そして、これらの問題点に対応する解決法を提案した。

以上のように、本研究の成果から得られた示唆は多く、日本語教育のヒントになるところが多いと思われる。

8.2 今後の課題

本研究は、有・無標識可能動詞の習得に関するいくつかの問題を解明したが、残された課題もある。以下にそれを述べる。

(一) 縦断的研究の方法を用いた習得研究

小池（1994：18-19）によれば、習得研究には様々な方法があるが、大きく横断的研究（cross-sectional study）と縦断的研究（longitudinal study）に分けられる。横断的研究とは、集団的被験者を対象として、ある特定の時期の一時点における習得現象について研究する方法である。それに対し、縦断的研究とは、特定の被験者を対象として、長期間にわたって、ある言語行動の発達過程について研究する方法である。本研究の第四、六章は学習者の習得過程や推移などについて、前者である横断的研究の方法で推測したが、今後は後者である縦断的研究の方法で研究を進めていきたい。

(二) 適切な指導法で教えることのできる研究

第二言語習得研究では、教室での適切な文法指導が第二言語学習の速度を高めるとされている（Long1983）。本研究は、中国語母語話者に対する無標識可能自動詞と無標識可能形式の指導法を提案したが、実際にそれが役立つかどうかは教育現場での実践が必要である。今後は、本研究が検討できなかった教室指導の効果について検証していきたい。

(三) 語彙的な側面に着目した習得研究

対のある自動詞、他動詞は文法項目であると同時に、それに含まれるそれぞれの動詞が独立した語彙として機能するという複数層の構造をなしていることから、対のある自動詞、他動詞の習得に関する問題を検討する際は、文法項目として捉えるだけでなく、語彙的特徴をも考慮する必要がある（中石 2003）。今後は、具体的な各ペア内における動詞の使用変化が見出せるような研究を進めていきたい。

参考文献

- 青木ひろみ (1997a) 「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『言語科学研究』3 : 11-26
- 青木ひろみ (2008) 『現代日本語における可能表現の研究』麗澤大学大学院言語教育研究科博士論文
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用辞典』凡人社
- 市川保子他 (2010) 『日本語誤用辞典：外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 伊藤秀明 (2012) 「学習者は「対のある自他動詞」をどのように使っているかー中国人日本語学習者の中級から超級に注目してー」『国際日本研究』4 : 43-52
- 乾とね (1991) 「潜在的比較の表す可能の意義についてー無意志主体可能動詞の可能の意義ー」『上智大学国文学論集』24 : 155-174
- 王怡韓 (2012) 「中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究ーこの役はあの新人俳優にはつとまらないー」『日本語研究』32 : 1-14
- 王忻 (2006) 『中国人日本語学習者に見られる誤用の研究ー日中言語対照の視点からー』外語教学与研究出版社
- 大江元貴 (2010) 「日本語における無意志可能の成立条件についてー「られる可能」「できる可能」「無標識可能」の比較ー」第7回筑波大学応用言語学研究会口頭発表ハンドアウト
- 大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現ー動詞制約を中心にー」『日本語文法』5 (1) : 196-211
- 岡崎典子・張建華 (1991) 「中国語話者の日本語学習時における自動詞・他動詞の使用に関する分析」『九州大学留学生センター紀要』9 : 19-38.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形ー自・他動詞の対応ー」『国語学』70 : 46-66
- 尾上圭介 (1998) 「文法を考える6出来文(2)」『日本語学』17 : 90-97
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準(改訂版)』凡人社
- 関承 (2012) 「中国語を母語とする日本語学習者における可能表現否定形の正用と誤用についてー「開かない」と「開けられない」を例にー」『北研学刊』8 : 91-100
- 関承 (2013a) 「有対自・他動詞による可能表現の習得研究ー中国語母語話者の場合ー」『北

研学刊』9：76-94

関承（2013b）「中国語母語話者における日本語可能表現の習得について－無対動詞の有・無標識可能表現に着目して－」『国際協力研究誌』20：21-30

関承（2014 a）「形態上の対応は可能表現における有対自・他動詞の習得に影響をもたらすか－中国語母語話者における異なる対応型の使用状況を比較して－」『北研学刊』10：82-90

関承（2014 b）「中国語母語話者に対する可能表現の指導法－可能形における自他動詞の分類から－」李东哲主编《日本语言文化研究》第三辑（上）中朝韩日文化比较研究丛书 延边大学出版社：458-470

楠本徹也（2009）「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集』79：65-85

小池生夫監修（1994）『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』SLA研究会（編）大修館書店

小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現－日本語学習者の習得状況－」『文藝言語研究言語篇』29：41-56

佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33（1）：1-262

張威（1998）『結果可能表現の研究－日本語・中国語対照研究の立場から－』くろしお出版

張威（2012）「現代日本語の結果可能表現のシンタクスと意味」『北研学刊』8：61-77

趙元任（1979）『漢語口語語法』商務印書館

張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析：中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク

都築順子（2001）「日本語の「可能の意味を含む自動詞」に関する一考察－中国語との比較対照において－」蔡全胜編『日本文化論叢：第二回日中文化教育研究フォーラム報告書』大連理工大学出版社：221-235

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

中石ゆうこ（2002）「自動詞と他動詞の用法とその指導について－初級日本語教科書の分析の結果から－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2（51）：385-392

中石ゆうこ（2003）「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2（52）：167-174

中石ゆうこ（2004）「縦断的発話データに基づく対のある自他動詞の習得研究－「きまる－

- きめる」「かわる-かえる」の使用状況から－』『広島大学大学院教育学研究科紀要』第
二部 53 : 311-318
- 中石ゆうこ (2005) 「日本語学習者による対のある自他動詞の使用の不均衡性」『日本教科
教育学会誌』 28 (1) : 59-67
- 長友文子 (1997a) 「可能形の規則による動詞の分類－日本語教育から見た可能表現の研究
(一)－」『和歌山大学教育学部紀要』人文科学 47 : 1-8
- 長友文子 (1997b) 「可能形における自動詞と他動詞－日本語教育から見た可能表現の研究
(二)－」『和歌山大学教育学部紀要』人文科学 47 : 9-16
- 西尾寅弥 (1978) 「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』 55
(5) : 173-186
- 早津恵美子 (1987a) 『他動詞と自動詞の対応について』東京外国語大学大学院外国語学研
究科修士論文
- 早津恵美子 (1987b) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』
6 : 79-109
- 早津恵美子 (1995) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて－意味的な特徴を中心に－」
須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』ひつじ書房 : 179-197
- 姫野昌子 (2001) 「日本語教育における文法の指導－可能表現を例として－」『日本語学』
20 (3) : 53-60
- 封小芹 (2007) 「可能の意味を含む有対自動詞の受容能力の習得について－中国人日本語学
習者の場合－」『ククロス:国際コミュニケーション論集』 4 : 49-63
- 龐黔林 (1999) 「日中両国語の可能表現について－自動詞の可能表現を中心に－」『神戸女
学院大学論集』 45 : 48-59
- 松岡弘 (監修)、庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (著) (2000) 『初級を教える人
のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 松下大三郎 (1923) 「動詞の自他被使動の研究 (一)」『国学院雑誌』 29 (12) : 27-45
- 松下大三郎 (1924a) 「動詞の自他被使動の研究 (二)」『国学院雑誌』 30 (1) : 17-31
- 松下大三郎 (1924b) 「動詞の自他被使動の研究 (完)」『国学院雑誌』 30 (2) : 31-48
- 松村明 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件－習得状況の分析を参考に－」『講

- 座日本語教育』29：151-165
- ヤコブセン、ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版：213-248
- 姚艷玲 (2004) 「中国語母語話者の日本語自他動詞の使用実態－作文と KY コーパスの分析を通して－」『東アジア日本語教育・日本文化研究』7：261-287
- 姚艷玲 (2006) 「有対自動詞による無標可能文の成立条件－〈可能〉の意味合成のメカニズム－」『日本語教育』128：90-99
- 姚艷玲 (2008) 「〈不可能〉の言語化に関する日中両語の対照研究」日中対照言語学会編『日本語と中国語の可能表現』白帝社：88-110
- 楊彩虹 (2007) 「可能の意味を持つ日本語自動詞の習得－中国語話者と韓国語話者を比較して－」『言語と文化』1：51-71
- 吉川武時 (2002) 「動詞の自他について」<http://w01.i-next.ne.jp/~g140179870/jita.html>
- 李萍 (2008) 「中国における日本語学習者の相対自・他動詞の習得状況」『国学院大学紀要』46：221-245
- 呂雷寧 (2007) 「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言葉と文化』8：187-200
- 呂雷寧 (2010) 「日本語の無意志自動詞表現の性質について－中国語の可能表現との対応関係に関連付けて－」『日中言語対照研究論集』12：75-90
- Kellerman, E. (1985). If at first you do succeed. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in Second language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House. 345-353.
- Lado, R. (1957), *Linguistic across cultures: Applied linguistics for language teachers*, The University of Michigan Press.
- Long, M. H. (1983). Does second language instruction make a difference? A review research. *TESOL Quarterly* 17/3, 359-382.
- Long, M. H. (2003). Stabilization and fossilization in interlanguage development. In C. J. Doughty & J. Williams (Eds.), *The handbook of second language acquisition*. Malden, MA: Blackwell. 487-535.
- Selinker, L. (1972), Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-231.

資料

資料 1 アンケート調査用テスト問題

一、请回答以下问题：

1. 年级：_____ 2. 民族：_____ 3. 性别：男 / 女
4. 年龄：_____ 5. 你学习日语多长时间了：_____年_____个月
6. 是否去过日本：是 / 否，去过_____年_____个月
7. 持有日语能力测试证书：N1 N2 N3 N4 N5 或者其它日语等级证书：_____
8. 除了汉语，还会什么语言：A 英语 B 朝鲜语 C 蒙古语 D 其它_____

二、请补全以下句子：

请用○选择正确答案，可多项选择。

当你选择“D”时，请在横线处写下你认为的正确答案。

手を怪我したので、ドアが……。 (手受伤了，所以……。)

- A: 開かない B: 開けない C: 開けられない D: どれも不可, _____

鍵の調子が悪いので、ドアが……。 (钥匙不好使，所以……。)

- A: 開かない B: 開けない C: 開けられない D: どれも不可, _____

頭が痛いので、勉強が……。 (头很疼，所以……。)

- A: 始まらない B: 生まれえない C: 始められない D: どれも不可, _____

時間にならないので、授業が……。 (还没到时间，所以……。)

- A: 始まらない B: 生まれえない C: 始められない D: どれも不可, _____

部屋が暗いので、目が……。 (屋子里很暗，所以……。)

- A: 見えない B: 見えられない C: 見られない D: どれも不可, _____

曇りなので、富士山が……。 (天很阴，所以……。)

- A: 見えない B: 見えられない C: 見られない D: どれも不可, _____

年のせいで、耳が……。 (上了年纪，所以……。)

- A: 聞こえない B: 聞こえられない C: 聞けない D: どれも不可, _____

ラジオの電波が弱いので、ニュースが……。 (收音机的信号很弱，所以……。)

- A: 聞こえない B: 聞こえられない C: 聞けない D: どれも不可, _____

三、请写下你的感想或疑问，我会及时与你沟通！

请留下你的 E-mail: _____。

資料2 アンケート調査用テスト問題

一、请回答以下问题：

1. 年級：_____ 2. 民族：_____ 3. 性別：男 / 女
4. 年齡：_____ 5. 你学习日语多长时间了：_____年_____个月
6. 是否去过日本：是 / 否，去过_____年_____个月
7. 持有日语能力测试证书：N1 N2 N3 N4 N5 或者其它日语等级证书：_____
8. 除了汉语，还会什么语言：A 英语 B 朝鲜语 C 蒙古语 D 其它_____

二、请补全以下句子：

请用○选择正确答案，可多项选择。

当你选择“D”时，请在横线处写下你认为的正确答案。

鍵の調子が悪いので、ドアが……。 (钥匙不好使，所以……。)

- A: 開かない B: 開けない C: 開けられない D: どれも不可, _____

電球が切れているので、電気が……。 (灯泡坏了，所以……。)

- A: 付かない B: 付けない C: 付けられない D: どれも不可, _____

避難所への道路が破壊されたので、荷物が……。 (通往避难所的路被损坏，所以……。)

- A: 届かない B: 届けない C: 届けられない D: どれも不可, _____

道に迷ってしまったので、家が……。 (迷了路，所以……。)

- A: 見つからない B: 見つけれない C: 見つけられない D: どれも不可, _____

時間にならないので、授業が……。 (还没到时间，所以……。)

- A: 始まらない B: 生まれない C: 始められない D: どれも不可, _____

首が痛いので、頭が……。 (脖子很疼，所以……。)

- A: 上がらない B: 上がれない C: 上げられない D: どれも不可, _____

三、请在横线处写下你的感想或疑问，我会及时与你沟通！

请留下你的 E-mail: _____。

資料3 アンケート調査用テスト問題

一、请回答以下问题：

1. 年级：_____ 2. 民族：_____ 3. 性别：男 / 女
4. 年龄：_____ 5. 你学习日语多长时间了：_____年_____个月
6. 是否去过日本：是 / 否，去过_____年_____个月
7. 持有日语能力测试证书：N1 N2 N3 N4 N5 或者其它日语等级证书：_____
8. 除了汉语，还会什么语言：A 英语 B 朝鲜语 C 蒙古语 D 其它_____

二、请补全以下句子：

请用○选择正确答案，可多项选择。

当你选择“D”时，请在横线处写下你认为的正确答案。

辞書を引かないと、英語の新聞はほとんど……。 (不查字典的话，几乎……英文报纸。)

- A：分からない B：分かれたい C：分かれたい D：どれも不可，_____

どんなに長く住んでいても、ここの生活には……。 (不论住多久，都……这里的生活。)

- A：慣れない B：慣れられない C：慣れさせない D：どれも不可，_____

明日はいい天気なので、たぶん強風は……。 (明天是个好天气，大概……大风。)

- A：吹かない B：吹けない C：吹かれない D：どれも不可，_____

日照りが続いているので、たぶん大雨は……。 (太阳一直高高地挂着，大概……大雨。)

- A：降らない B：降れない C：降られない D：どれも不可，_____

外がうるさいので、眠ろうとしても……。 (外面很吵，所以怎么睡也……。)

- A：眠らない B：眠れない C：眠れられない D：どれも不可，_____

赤ちゃんなので、まだ……。 (他是个刚出生的孩子，所以还……。)

- A：走らない B：走れない C：走れられない D：どれも不可，_____

中国語を勉強したことがないので、漢字が……。 (没学过汉语，所以……汉字。)

- A：書かない B：書けない C：書けられない D：どれも不可，_____

私は中国人ではないので、中国語が……。 (我不是中国人，所以……汉语。)

- A：話さない B：話せない C：話せられない D：どれも不可，_____

三、请写下你的感想或疑问，我会及时与你沟通！

请留下你的 E-mail：_____。

調査データ

第四章 有対自動詞のみが成り立つ表現

一年生			二年生			三年生		
	見える	聞こえる		見える	聞こえる		見える	聞こえる
1	B	A	1	A	A	1	A	A
2	C	A	2	A	A	2	A	A
3	A	A	3	A	A	3	A	C
4	A	A	4	A	A	4	A	A
5	C	A	5	A	A	5	B	A
6	B	A	6	A	A	6	A	A
7	B	B	7	A	A	7	A	B
8	A	A	8	A	A	8	A	A
9	B	A	9	A	A	9	A	A
10	A	A	10	C	C	10	B	A
11	D	A	11	A	A	11	A	A
12	A	A	12	A	A	12	A	B
13	A	B	13	B	A	13	A	A
14	A	A	14	A	A	14	B	A
15	A	A	15	B	B	15	A	A
16	A	C	16	C	B	16	C	C
17	A	B	17	A	A	17	A	A
18	C	C	18	A	A	18	B	A
19	C	A	19	A	B	19	C	C
20	A	A	20	A	B	20	A	A
21	A	A	21	B	A	21	A	A
22	C	C	22	A	A	22	A	B
23	C	A	23	A	A	23	A	A
24	C	B	24	C	A	24	C	B
25	A	B	25	A	A	25	A	A
26	A	C	26	A	A	26	A	A

27	A	C	27	A	A	27	C	A
28	B	A	28	A	C	28	A	A
29	A	D	29	B	C	29	A	A
30	A	B	30	A	B	30	C	B
31	A	C	31	A	B	31	B	B
32	A	C	32	A	A	32	A	B
33	A	C	33	A	A	33	A	A
34	A	C	34	B	A	34	A	C
35	B	B	35	C	A	35	A	C
36	B	B	36	A	A	36	B	C
37	B	B	37	C	A	37	A	B
38	B	B	38	C	A	38	B	C
39	C	B	39	A	A	39	A	A
40	A	B	40	A	B	40	B	A
41	C	C	41	A	A	41	B	A
42	B	A	42	B	B	42	A	A
43	B	B	43	B	A	43	A	A
44	B	B	44	C	A	44	B	B
45	A	D	45	A	B	45	C	C
46	C	D	46	B	A	46	A	A
47	B	D	47	C	B	47	C	C
48	C	A	48	B	D	48	C	C
49	B	B	49	B	C	49	A	B
			50	B	B	50	B	B
			51	B	A	51	B	A
			52	C	B	52	A	A
			53	B	C	53	A	A
			54	B	A	54	A	A
			55	A	C	55	A	C

			56	A	B	56	C	A
			57	B	C	57	A	A
			58	B	B	58	A	A
			59	B	C			
			60	C	C			
			61	B	B			
			62	B	C			
			63	B	B			

第四章 有対他動詞のみが成り立つ表現								
一年生			二年生			三年生		
	開ける	始める		開ける	始める		開ける	始める
1	C	C	1	B	A	1	B	B
2	C	C	2	B	A	2	B	A
3	C	B	3	B	C	3	B	C
4	B	D	4	B	B	4	D	A
5	C	B	5	B	B	5	B	C
6	B	C	6	B	B	6	B	B
7	C	C	7	B	C	7	C	A
8	C	B	8	B	B	8	C	A
9	B	C	9	B	B	9	C	A
10	B	B	10	C	A	10	B	A
11	C	D	11	B	A	11	B	A
12	B	B	12	B	B	12	C	B
13	C	A	13	C	B	13	C	C
14	B	B	14	B	C	14	B	A
15	C	C	15	C	B	15	C	B
16	B	B	16	B	A	16	A	C
17	B	C	17	B	B	17	C	B
18	C	C	18	D	B	18	B	A
19	B	C	19	B	B	19	A	C
20	B	B	20	B	B	20	B	B
21	B	B	21	C	B	21	A	B
22	C	B	22	B	B	22	C	C
23	B	C	23	B	B	23	B	A
24	B	B	24	B	B	24	B	A
25	C	C	25	B	B	25	B	C
26	B	B	26	B	B	26	C	C

27	C	C	27	B	A	27	A	A
28	A	C	28	B	B	28	A	B
29	A	D	29	B	B	29	B	C
30	B	B	30	B	B	30	C	C
31	B	B	31	B	C	31	C	B
32	A	B	32	C	B	32	B	A
33	C	A	33	B	B	33	C	C
34	B	A	34	B	B	34	B	D
35	B	B	35	B	AB	35	C	B
36	C	C	36	B	B	36	C	B
37	B	B	37	B	C	37	C	C
38	B	C	38	B	B	38	C	B
39	B	D	39	B	A	39	B	C
40	B	A	40	C	C	40	B	A
41	C	A	41	B	B	41	A	B
42	C	B	42	C	B	42	B	A
43	B	C	43	B	B	43	B	A
44	C	C	44	B	B	44	A	C
45	C	D	45	B	B	45	B	A
46	C	C	46	A	B	46	B	A
47	B	D	47	A	A	47	B	A
48	C	C	48	B	B	48	A	A
49	C	B	49	B	B	49	B	A
			50	B	C	50	B	D
			51	B	B	51	B	C
			52	B	B	52	B	A
			53	A	A	53	B	A
			54	B	B	54	B	A
			55	C	B	55	C	A

			56	C	B	56	A	C
			57	B	C	57	B	A
			58	B	A	58	B	A
			59	A	A			
			60	B	A			
			61	C	B			
			62	A	B			
			63	B	B			

第四章 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現（一年生）

	見える/見る	聞こえる/聞く	開く/開ける	始まる/始める
1	B	B	C	C
2	C	A	B	C
3	B	A	C	B
4	A	A	C	B
5	A	C	C	A
6	B	C	B	A
7	C	A	B	B
8	B	A	A	A
9	C	A	B	C
10	A	B	C	C
11	C	A	B	C
12	A	C	B	B
13	B	C	B	A
14	A	A	B	B
15	A	B	C	A
16	A	C	B	B
17	B	B	B	B
18	C	C	C	C
19	C	A	B	C
20	A	C	B	B
21	B	C	B	C
22	C	A	B	B
23	C	A	B	B
24	B	C	B	B
25	C	B	A	B
26	B	C	B	B
27	C	B	C	C

28	A	A	C	C
29	A	A	A	D
30	A	B	C	B
31	B	A	B	C
32	A	A	C	B
33	A	A	A	C
34	A	A	B	B
35	B	B	B	B
36	B	B	C	A
37	B	B	B	B
38	B	B	B	C
39	B	B	C	C
40	C	B	C	B
41	B	A	B	A
42	C	B	B	A
43	B	C	B	C
44	B	B	C	C
45	D	B	C	A
46	C	D	C	D
47	C	C	B	B
48	B	A	B	C
49	C	C	A	A

第四章 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現（二年生）

	見える/見る	聞こえる/聞く	開く/開ける	始まる/始める
1	A	A	B	A
2	A	A	B	A
3	B	A	A	A
4	B	A	C	A
5	A	A	B	A
6	A	A	B	A
7	A	A	B	A
8	A	A	C	A
9	B	A	B	B
10	B	C	C	D
11	A	B	A	B
12	C	A	B	A
13	A	B	C	C
14	B	A	B	B
15	C	A	A	A
16	B	B	A	B
17	A	A	B	C
18	B	A	B	C
19	B	A	B	B
20	B	A	B	B
21	A	B	C	A
22	A	C	B	C
23	C	A	A	A
24	A	B	B	A
25	A	A	B	B
26	B	A	B	C
27	A	B	B	B

28	A	C	B	C
29	A	B	C	B
30	B	B	A	B
31	C	A	D	A
32	B	B	C	A
33	A	A	D	D
34	B	A	C	A
35	A	A	B	A
36	A	A	B	A
37	C	B	B	C
38	C	A	B	B
39	A	A	A	A
40	A	A	B	A
41	A	B	C	B
42	B	B	B	B
43	A	B	B	B
44	C	A	B	A
45	A	B	B	B
46	C	C	B	A
47	B	C	C	A
48	B	A	C	A
49	C	B	B	B
50	B	B	C	B
51	A	A	A	B
52	B	A	B	B
53	B	C	C	B
54	B	A	B	A
55	B	B	C	A
56	A	A	B	A

57	A	A	C	B
58	A	B	B	B
59	B	C	B	D
60	A	B	B	A
61	B	C	B	B
62	B	A	C	A
63	B	B	B	C

第四章 有対自・他動詞の両方が成り立つ表現（三年生）

	見える/見る	聞こえる/聞く	開く/開ける	始まる/始める
1	A	A	A	A
2	B	B	A	C
3	B	C	A	B
4	B	A	A	A
5	C	C	C	C
6	B	B	C	A
7	C	B	C	B
8	A	B	C	B
9	A	A	B	C
10	B	A	B	A
11	C	A	A	A
12	B	A	B	C
13	B	A	B	A
14	A	A	A	A
15	C	A	B	A
16	B	B	A	D
17	B	A	B	C
18	A	C	B	A
19	A	C	A	A
20	A	A	B	B
21	B	A	C	A
22	A	A	B	B
23	B	B	B	B
24	A	B	B	A
25	A	A	C	A
26	A	A	B	B
27	C	A	B	A

28	A	A	B	B
29	A	A	C	A
30	B	A	A	C
31	B	B	C	A
32	B	B	C	B
33	A	A	C	A
34	C	A	C	C
35	B	A	C	B
36	A	C	B	B
37	B	B	B	C
38	B	C	B	B
39	A	A	B	B
40	B	B	A	A
41	C	B	A	A
42	B	A	B	A
43	B	A	B	A
44	B	A	B	C
45	A	A	A	A
46	A	A	A	A
47	A	A	A	A
48	A	A	A	A
49	B	A	B	A
50	D	C	C	A
51	C	B	C	B
52	B	A	B	A
53	B	A	B	A
54	B	A	B	A
55	A	A	A	D
56	A	C	B	C

57	B	A	B	A
58	B	A	B	A

第五章						
	対応型 I			対応型 II		
	開く 開ける	付く 付ける	届く 届ける	見つかる 見つける	始まる 始める	上がる 上げる
1	A	B	D	B	A	B
2	A	A	A	A	C	C
3	A	B	A	A	B	C
4	A	A	A	B	A	C
5	C	A	B	B	C	B
6	C	B	B	B	A	B
7	C	B	A	B	B	C
8	C	C	C	B	B	C
9	B	C	B	A	C	A
10	B	C	B	B	A	B
11	A	B	A	A	A	A
12	B	A	B	B	C	B
13	B	A	B	A	A	B
14	A	A	B	A	A	C
15	B	A	B	C	A	C
16	A	A	C	A	D	A
17	B	C	A	B	C	C
18	B	C	B	A	A	A
19	A	A	C	A	A	A
20	B	C	B	A	B	C
21	C	C	C	A	A	B
22	B	B	B	B	B	B
23	B	C	A	B	B	B
24	B	B	B	B	A	C
25	C	C	C	C	A	C

26	B	B	B	B	B	B
27	B	C	B	A	A	A
28	B	C	A	B	B	A
29	C	B	C	A	A	A
30	A	B	B	C	C	B
31	C	B	C	C	A	C
32	C	B	B	C	B	B
33	C	A	B	C	A	B
34	C	B	C	A	C	D
35	C	B	C	A	B	B
36	B	C	B	B	B	C
37	B	B	A	B	C	C
38	B	B	B	B	B	C
39	B	B	B	B	B	B
40	A	B	C	C	A	C
41	A	C	C	A	A	A
42	B	B	B	A	A	A
43	B	B	B	A	A	A
44	B	C	C	A	C	C
45	A	C	A	A	A	B
46	A	C	A	A	A	B
47	A	A	A	A	A	B
48	A	C	A	A	A	B
49	B	B	B	A	A	A
50	C	B	B	D	A	B
51	C	A	B	D	B	C
52	B	B	B	A	A	A
53	B	B	B	A	A	A
54	B	D	B	B	A	B

55	A	B	A	A	D	C
56	B	C	A	B	C	A
57	B	B	B	A	A	A
58	B	B	B	A	A	B

第六章 一年生

第六章 一年生								
	有標識可能動詞				無標識可能自動詞			
	書く	話す	眠る	走る	分かる	慣れる	吹く	降る
1	B	B	B	B	A	B	C	C
2	B	B	B	B	A	A	B	B
3	C	C	B	B	A	B	A	B
4	B	B	B	B	B	A	B	B
5	B	B	B	B	B	B	A	A
6	B	B	C	B	A	B	B	B
7	B	B	B	C	A	A	C	C
8	C	C	A	B	A	B	A	C
9	B	B	B	B	A	A	B	B
10	B	B	C	B	A	A	C	B
11	B	B	B	B	B	A	B	C
12	B	B	B	B	B	A	B	B
13	B	B	B	A	A	A	C	B
14	B	B	B	B	B	A	B	B
15	D	B	C	C	C	B	A	A
16	B	B	B	B	B	A	B	B
17	B	B	B	B	B	A	B	B
18	B	B	C	B	B	B	B	B
19	B	B	B	B	B	A	B	B
20	B	B	B	B	B	B	B	B
21	B	B	C	B	B	C	C	B
22	C	B	B	C	A	B	B	B
23	B	B	B	C	A	B	C	B
24	B	B	B	B	B	A	B	B
25	C	C	B	A	A	A	B	C
26	B	C	B	A	A	B	B	B

27	B	B	C	C	B	B	B	B
28	B	B	C	B	B	A	B	B
29	A	B	B	A	A	A	A	A
30	B	C	B	B	B	B	C	B
31	B	B	A	C	A	C	C	B
32	C	B	B	B	B	B	C	C
33	B	C	B	A	B	C	B	C
34	B	C	B	C	A	B	B	B
35	B	B	C	B	B	B	B	B
36	B	B	C	A	C	B	B	B
37	B	C	B	B	B	B	B	B
38	B	B	B	B	B	B	B	BC
39	B	A	B	A	D	B	A	C
40	B	C	B	C	A	B	B	B
41	C	C	B	B	A	C	B	C
42	B	A	C	B	C	B	A	C
43	B	C	C	A	A	B	A	B
44	C	C	C	C	C	B	B	B
45	D	B	C	A	B	B	B	A
46	C	C	C	C	D	B	D	B
47	C	B	C	C	B	B	C	C
48	C	C	C	C	C	B	D	C
49	C	A	A	B	B	B	B	B

第六章 二年生

第六章 二年生								
	有標識可能動詞				無標識可能動詞			
	書く	話す	眠る	走る	分かる	慣れる	吹く	降る
1	B	B	B	B	A	A	A	A
2	B	B	B	B	A	A	A	A
3	B	B	B	B	B	C	A	A
4	B	B	B	B	A	B	A	A
5	B	B	B	B	A	B	B	A
6	B	B	B	B	A	B	B	A
7	B	B	B	B	A	C	A	B
8	B	B	B	B	A	B	A	A
9	B	B	B	B	A	B	A	B
10	B	B	B	B	B	A	A	A
11	B	B	B	A	A	A	A	A
12	B	B	A	A	A	B	A	A
13	B	B	B	B	A	B	B	C
14	B	B	B	B	B	C	A	A
15	B	B	B	B	A	B	B	A
16	B	B	B	B	A	A	A	A
17	B	B	B	B	A	B	A	C
18	B	B	B	B	A	B	C	B
19	B	B	B	B	B	B	A	B
20	B	B	B	B	B	B	A	B
21	B	B	B	B	A	B	B	B
22	B	A	C	B	A	B	A	A
23	B	B	C	A	A	B	A	B
24	B	B	C	B	A	B	B	A
25	B	B	B	C	B	B	B	B
26	B	B	B	B	B	B	C	B

27	B	A	C	A	A	A	A	A
28	B	B	B	C	A	B	B	C
29	B	B	B	B	C	B	B	A
30	B	B	B	B	A	B	B	C
31	B	B	B	B	B	C	B	C
32	A	C	B	B	B	B	B	A
33	B	C	B	B	A	B	B	B
34	B	B	B	B	A	B	A	A
35	B	B	B	B	B	AB	B	B
36	D	D	A	B	A	B	B	A
37	B	B	C	C	A	C	B	B
38	B	B	B	B	B	B	B	B
39	B	A	B	A	B	A	A	B
40	B	A	A	B	B	C	B	B
41	B	D	C	C	A	B	B	C
42	B	B	C	B	B	B	B	B
43	B	B	B	A	A	B	C	C
44	B	B	B	B	B	B	B	B
45	B	B	B	B	C	B	B	B
46	B	B	D	A	A	B	A	C
47	B	A	B	A	A	A	A	A
48	B	B	B	C	B	B	B	A
49	B	B	B	B	B	B	B	B
50	B	B	C	B	B	C	B	C
51	B	B	B	A	A	B	B	B
52	B	B	B	B	B	B	B	B
53	C	B	C	A	A	A	B	C
54	B	C	A	B	C	B	B	C
55	B	C	A	A	B	B	C	B

56	B	B	C	C	C	B	B	C
57	A	B	B	A	C	C	B	A
58	B	B	A	B	B	A	B	B
59	B	A	C	C	A	A	A	D
60	B	C	C	C	A	A	B	B
61	C	B	C	C	B	B	B	B
62	B	B	C	A	C	B	B	C
63	C	B	B	B	B	B	B	B

第六章 三年生

第六章 三年生								
	有標識可能動詞				無標識可能動詞			
	書く	話す	眠る	走る	分かる	慣れる	吹く	降る
1	A	B	B	B	B	A	A	A
2	B	B	B	A	A	A	A	C
3	B	B	B	B	A	C	A	B
4	B	B	B	B	A	A	A	B
5	B	B	A	A	B	B	B	B
6	B	B	C	B	B	B	D	C
7	B	B	B	B	A	A	A	A
8	B	B	B	B	A	A	A	A
9	B	B	B	B	A	A	A	A
10	B	B	B	C	A	B	B	A
11	B	B	D	B	A	A	A	A
12	B	B	C	B	A	B	A	A
13	B	B	B	B	A	A	A	C
14	C	B	B	B	A	A	A	B
15	C	C	C	C	A	A	A	C
16	B	A	A	B	A	B	B	B
17	B	B	B	C	A	A	C	C
18	B	B	B	B	A	A	C	A
19	A	A	A	B	A	B	B	B
20	B	B	B	B	C	A	A	A
21	A	B	B	A	C	A	B	C
22	B	B	B	C	A	A	A	A
23	B	A	A	B	A	B	A	A
24	B	B	B	B	A	A	A	B
25	B	B	B	B	A	A	A	A
26	B	B	B	B	A	A	A	A

27	B	B	C	C	A	A	A	C
28	B	B	B	A	A	A	B	B
29	B	B	B	B	A	A	C	B
30	B	B	C	B	A	B	A	A
31	B	C	B	B	C	B	C	C
32	C	B	B	B	A	B	B	B
33	D	B	B	C	A	B	A	A
34	B	B	B	B	A	B	A	A
35	B	B	B	B	B	A	A	C
36	B	B	C	C	C	C	B	C
37	C	B	B	B	C	A	C	A
38	B	B	C	C	C	C	B	C
39	B	B	B	B	A	B	A	A
40	B	B	B	C	A	B	A	A
41	B	C	B	B	A	B	A	A
42	B	B	B	B	A	B	B	C
43	B	B	B	B	A	B	B	C
44	C	B	C	A	B	B	B	C
45	B	B	B	B	A	A	B	C
46	B	B	B	B	A	B	B	C
47	B	B	B	B	A	A	B	A
48	B	B	B	B	A	A	B	C
49	B	B	B	A	A	B	B	C
50	A	B	A	B	A	B	B	B
51	B	C	A	C	B	B	B	C
52	B	B	B	B	A	B	B	A
53	B	B	B	B	A	B	B	A
54	B	B	B	B	A	B	B	A
55	C	B	A	C	A	A	D	A

56	C	C	C	C	A	A	C	C
57	B	B	B	B	A	B	B	C
58	B	B	B	B	A	B	B	C

謝 辞

まず、本論文の執筆に際しましては、終始熱心なご指導とご鞭撻をいただきました主任指導教員である佐藤暢治先生に感謝の意を表したいと申し上げます。論文テーマの設定から、研究の目的、方法、そしてデータの分析に至るまで、どんな細かい点にも相談に乗ってくださり、その都度貴重なアドバイスをいただき、細部にわたるご指導をいただきました。ここで、これまで先生にいただきました数々のご親切に心より感謝いたします。

さらに、黒田則博先生、深見兼孝先生、高永茂先生、于康先生より、本論文に対する貴重なご意見とご指摘を承りましたことに深く感謝申し上げます。

そして、本研究の調査を遂行するために、ご協力をいただいた中国黒竜江省 A 大学に対して、心よりお礼申し上げます。特に、ソウ先生とウ先生より様々なご協力をいただきました。ここで改めて謝意を表します。

以上のように、多くの先生方のご指導とご協力があったからこそ、本研究が完成できたと存じますが、第二の先生方とも呼べるべき、大学院生の皆さんにも、授業で活発な議論を通じて様々なご意見をいただきました。

最後に、五年半の留学生活において、楽しいときも苦しいときも苦楽を共にし、支え続けてくれました両親、いつも私のことを温かく励ましてもらいました妻、大学内外の多くの友人に、この場を借りて感謝いたします。

2014年9月

西条にて